教育課題研究

『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援のあり方の改善）」

（平成２４年度～平成２６年度）

研　究　の　ま　と　め

（２年次）

平成２６年３月

宮崎県立みやざき中央支援学校

目　　次

Ⅰ　研究主題 …… 1

Ⅱ　主題設定の理由 …… 1

Ⅲ　「共に生きる力」について …… 2

　1　「共に生きる力」の構造 …… 3

　2　みやざき中央支援学校におけるキャリア教育 …… 4

Ⅳ　研究の仮説 …… 5

Ⅴ　研究の組織 …… 5

Ⅵ　研究の方法 …… 6

Ⅶ　研究計画 …… 8

Ⅷ　研究・研修の経過 …… 9

Ⅸ　研究の実際

　1　小学部研究班 …… １１

　2　中学部研究班 …… ２１

　3　高等部研究班 …… ３７

　4　寄宿舎研究班 …… ５７

Ⅹ　研究のまとめと今後の課題 …… ７１

Ⅰ　研究主題

『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援のあり方の改善)」

Ⅱ　主題設定の理由

本校では、児童生徒の卒業後の自立と社会参加を目指して、自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童生徒の育成を目指している。本校の児童生徒は、児童生徒同士、教職員、保護者、あるいは地域社会など彼らを取り巻く様々な人々とのつながりの中で共に生活している。児童生徒が今を、そして将来を生きていく上で、このつながりは欠かすことのできないものである。その中で、児童生徒が関わる人々とお互いを正しく理解し、共に助け合い、励まし合い、支え合ってみんなで生きていくこと、そして自分らしさを出しながら主体的に社会参加し心豊かに生きていくことができるために､本校では児童生徒のライフステージと周りの環境とのかかわりにおいて必要な力として｢共に生きる力」を定めている。

「共に生きる力」は、①健康体力②身辺生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他、の８つからなっており、本校におけるキャリア教育の基礎となるとともに本校の教育理念として掲げられているものである。

近年、本校では在籍する児童生徒の障がいの重度化・多様化が課題の一つであり、それらに対応した教育課程の見直しや授業の改善の必要性も叫ばれている。そこで、２４年度から３カ年にわたって『共に生きる力』を育む「授業づくり」（ただし、後述の寄宿舎研究班においては、「授業づくり」を「支援の在り方の改善」と読み替えて実施する。）に各研究班において取り組むことにした。「授業づくり」とは、授業の計画から実践までを広く捉えることとし、より実践的な取組を目指した。「授業づくり」は学校全体で取り組むことができ、また研究班ごとの課題にも対応できるという利点もある。そこで各研究班における課題をいかに解決するかを考慮しながら副題を設定した上で、研究を進めるにあたっての共通確認事項を次のように設定した。

①　研究班における課題解決のための仮説を立てる。 ②　研究計画を立てる。 ③　教育課程や指導計画の見直し、改善などを行う ④　教材研究を行う。 ⑤　授業研究を行う。 ⑥　研究の評価を行う。

「授業づくり」を行う際には、次項に記した『共に生きる力』の概念やこれまでの研究の成果を生かしながら、「自ら学ぶ」児童生徒を育てることを大切にしていきたい。将来の自立や社会参加の仕方として就労だけでなく様々な方法があることなど、幼児児童生徒や卒業生の各段階で障がいの状態や特性に応じた自立や社会参加の方法があることを確認するとともに、『共に生きる力』の８つの力を目指す目標としながらも、その到達度には児童生徒の実態や環境、ライフステージによって幅広い状態があると考えたい。

そして、全体研修も同じテーマで取り組み、特別支援学校（知的障がい）教育課程についての研修、行動分析の仕方、対応の仕方、障がいについての学習など、研究で必要とすることを学ぶ場となるようにしたい。そして、課題解決に向けて全職員でその方策を考え、実践し、この研究を推進していきたいと考える。

Ⅲ　『共に生きる力』について

本校がこれまでの研究において、児童生徒の生活年齢の段階と周りの環境との関わりにおける必要な力をまとめたものであり、①健康体力②身辺生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他、の８つからなっている。

『共に生きる力』とは、障がいのある者とない者が同じ社会に生きる人間としてお互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合っていく社会にあって、児童生徒が地域社会の一員として、生涯にわたって様々な人々と交流し、主体的に社会参加しながら心豊かに生きていくことができる力と捉えて、本校の教育活動を考えるときに大切な概念としている。それは、宮崎県の目指す共生社会の実現にむけて本校が取り組むことの一つであるとも言える。

また本校におけるキャリア教育は「児童生徒それぞれに合った将来の自立と社会参加をするための教育」とし、教育活動全体で行うこととしている（図２「キャリア教育」全体計画参照：本文４ページ／平成２０・２１年度宮崎県教育委員会指定研究)。「共に生きる力」を育む教育と本校におけるキャリア教育とは、その目指すところから密接な関係にあり、今後もその取組を充実させていく必要がある。

そして本校の児童生徒は、幅広い年齢や発達段階、ライフステージにあるため、本校における「自立」と「社会参加」については、次のように定義している。「自立」とは、「最小の支援でその人が自分の持っている力を１００％発揮する状態」であり、「社会参加」とは、「児童生徒や卒業生がそれぞれの生活の場において適応できている状態」である。また、「適応できている」ということの意味も、ありのままの自分で、その日一日を心豊かに暮らすことや自分の役割を果たし貢献できていることも含めて考えるようにした。

さらにこの『共に生きる力』を育むために行う教育活動の基礎には、ICF の概念の正しい理解や人権教育を基礎とした正しい障がいの認識があると考えている。

次ページの図１は、『共に生きる力』の構造図である。

1　「共に生きる力」の構造

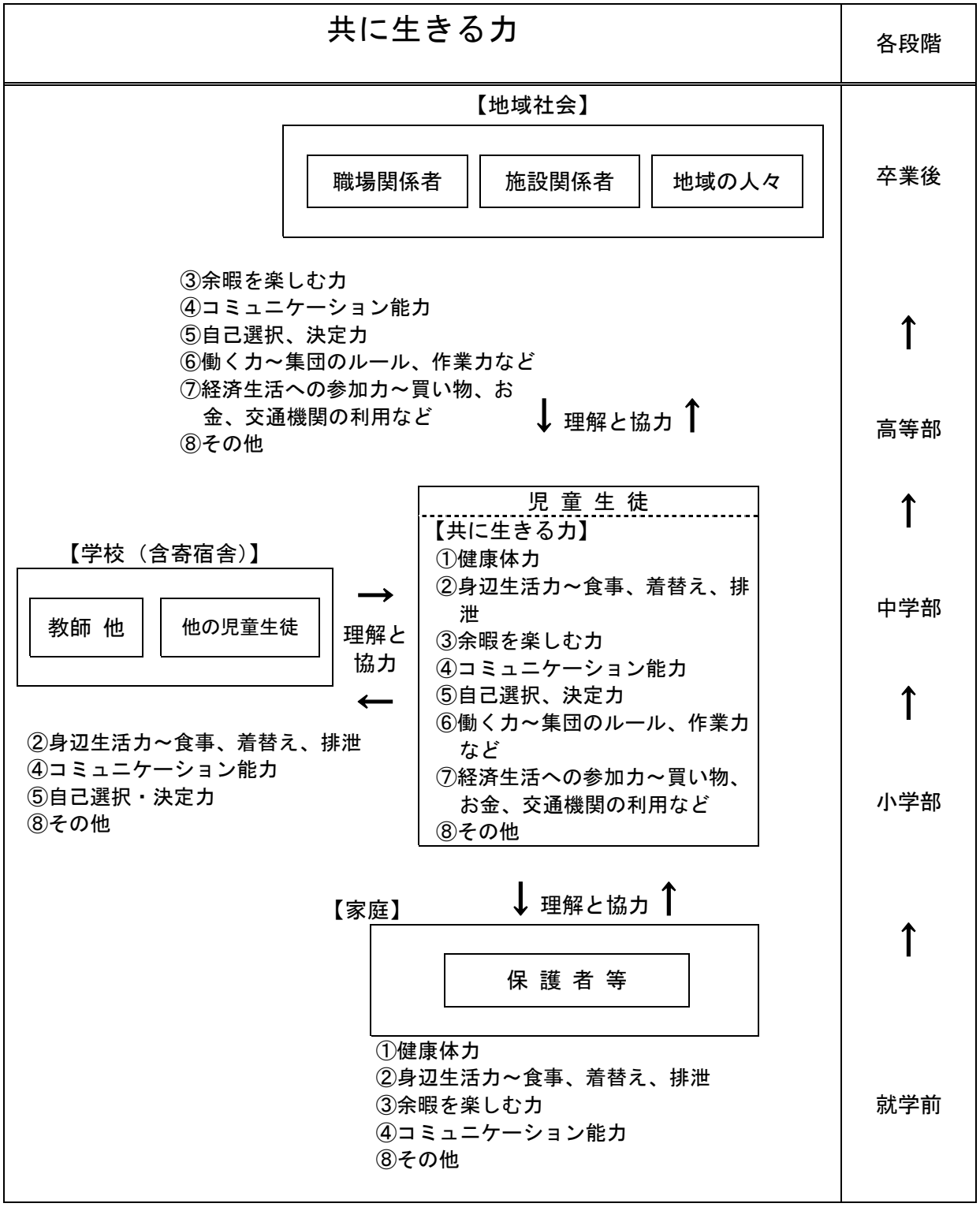


図１：みやざき中央支援学校『共に生きる力』構造図

２　みやざき中央支援学校におけるキャリア教育

キャリア教育の目的

ライフステージや発達段階に応じて求められる役割を果たそうとする意欲や具体的な力を身につけ、自立と社会参加、豊かな生活の実現を図る。

〈キャリア教育の内容〉
- ○勤労観、職業観の育成
- ○家庭生活、社会生活に必要な知識や技能の育成
- ○自主的、主体的に活動する力の育成

学校教育目標

豊かな心とたくましい生活力を養い、積極的に社会参加し、自立的生活を営むことができる心身とともに調和のとれた人間の育成を図る

〈めざす児童生徒像〉
○元気でねばり強い子ども　○明るくやさしい子ども　○進んで取り組む子ども

〈共に生きる力〉
①健康体力②身辺生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他

教育関係法規

日本国憲法、教育基本法、学校教育法、学習指導要領、宮崎県教育基本指針

児童生徒・保護者の願い

- ○自分のことは自分でできるようになりたい
- ○毎日、元気に楽しく生活したい
- ○いろいろな事に挑戦しやりたい仕事を見つけたい
- ○家から遠くないところで働きたい

学部・学級・舎目標

一人一人の障がいの状態、発達段階及び特性等に応じた指導を進め、その可能性を最大限に伸ばす。

〈小学部〉	〈中学部〉	〈高等部〉	〈寄宿舎〉
○健康で安全な日常生活をするために、必要な体力と基本的生活習慣を養う。 ○集団生活に進んで参加し、楽しく仲良く生活する気持ちを養う。 ○自分から進んで最後までがんばりぬこうとする気持ちを養う。	○健康で安全な生活を送るための体力と、最後までやりとげようとする態度を育てる。 ○集団生活に意欲的に参加し、友達と協調して生活する力を育てる。 ○基本的な生活習慣を身に付け、社会生活に必要な基礎的・基本的な知識・技能を育てる。	○たくましく社会生活・家庭生活をおくる力をつけるために、健康の維持・推進を図る。 ○たくましく社会生活・家庭生活をおくる力をつけるために、基本的生活習慣を確立する。 ○社会生活や家庭生活・職業生活のために、対人間関係能力（集団参加・コミュニケーション等）を養う。 ○社会生活や家庭生活・職業生活のために、基礎的基本的な態度・知識・技能を育てる。	日常生活に必要な基本的生活習慣の確立を図り、社会に適応する態度や能力を高める。 ○自分の力で自分の身辺の処理をする意欲や能力を養う。 ○集団生活に参加しみんなと仲良くできる態度を養う。 ○健康な体と明るく素直な性格を培う。 ○ゆとりの時間や余暇の時間を活用する能力を高める。

進路支援部方針

- ○児童生徒・保護者の思いや願いを支え、その実現に向けた適切な支援ができるよう、小学部からの組織的なキャリア教育を推進する。
- ○児童生徒の障がいの状況及び発達段階や特性等に応じた適切な進路指導を進めるとともに、自立を支援しながら社会生活を行うための環境づくりを推進する。

〈主な取り組み〉
- ○進路学習、進路相談、現場実習・就労前実習、進路情報、調査統計、追指導など、
- ○職場開拓、進路研修会、支援会議

キャリア発達の目標【キャリア発達段階・内容表（試案）より】

	小学部	中学部	高等部	
キャリア発達の段階	職業及び生活にかかわる基礎的スキル獲得の時期	職業及び生活にかかわる基礎的スキルを土台に、それらを統合して働くことに応用するスキル獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要なスキルを実際に働く生活を想定して具体的に適用するためのスキル獲得の時期	
①人間関係形成能力	人との関わり→ 集団参加→ 意思表現→ 挨拶、清潔、身だしなみ→	自己理解→ 他者理解→ 協力・共同→ → 場に応じた言動→	→ → → → →	卒業後の生活
②情報活用能力	様々な情報への関心→ 社会のきまり→ 金銭の扱い→	情報収集と活用→ → 金銭の管理→	→ 法や制度の理解→ 消費生活の理解→	
③将来設計能力	役割の理解と分担→ 習慣形成→ 夢や希望→	働くことの意義→ 役割の理解と実行→ → → 生きがい・やりがい→ 進路計画→	→ → → → → →	仕事、家庭生活、余暇など
④意思決定能力	目標設定→ 選択→ 振り返り→	→ 選択（決定、責任）→ 肯定的な自己評価→	→ → → 自己調整→	

幼児期からの遊びを中心とした発達全体の促進

本校におけるキャリア教育

「児童生徒それぞれに合った将来の自立と社会参加をするための教育[指導・支援]」→教育活動全体で行う

小学部	中学部	高等部
各教科・道徳・特別活動・自立活動	各教科・道徳・特別活動・自立活動 総合的な学習の時間	各教科・道徳・特別活動・自立活動 総合的な学習の時間

キャリア教育の基盤

専門性の向上	保護者との連携	地域との連携	関係機関との連携	校内の組織作り	啓発活動
○自主的、主体的な活動を促す具体的な支援の方法 ○児童生徒の思いを育てるキャリアカウンセリング	○進路研修会 ○連絡帳の活用 ○二者・三者面談、個別面談 ○ケース会議、支援会議 ○関係行事	○地域の行事への参加 ○交流・共同学習 ○地域資源の活用 ○居住地校交流	○福祉、医療、労働機関との定期的な情報交換 ○支援会議の開催 ○他校との連携	○全体推進計画 ○全体学習計画 ○学部、学年、校務分掌間の連携	○学校HPによる発信 ○関係会議等による活動 ○リーフレット

図２：みやざき中央支援学校キャリア教育全体計画

Ⅳ　研究の仮説

『共に生きる力』の構造をもとに、児童生徒一人一人の指導内容や方法及び支援の在り方の工夫・改善を図り、「授業づくり（支援のあり方の改善)」を行えば、児童生徒の望ましい成長・発達が促され主体的な学習活動が実現し、自立と社会参加のための資質向上につながるであろう。

Ⅴ　研究の組織

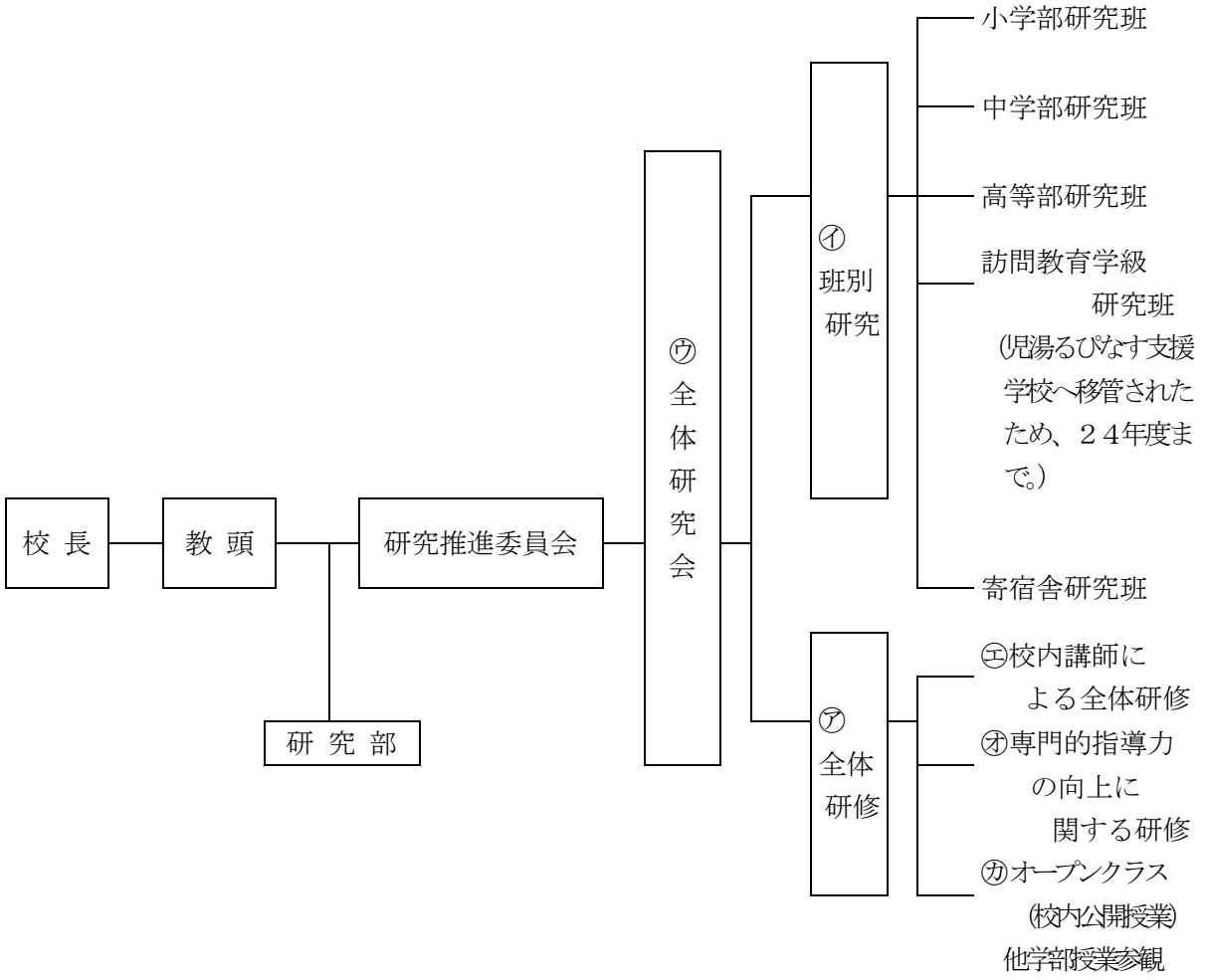


図３：みやざき中央支援学校研究組織

Ⅵ　研究の方法

小学部、中学部、高等部、訪問教育学級（２４年度まで)、寄宿舎の５班（２５年度より４班）で構成した班別研究において、『共に生きる力』をはぐくむための具体的な指導内容や方法及び支援の在り方について、実践を通して検証する。また併せて全体研究会や全体研修を行うようにする。

１　全体研修（…㋐）について

『共に生きる力』を育むための指導や支援に必要なことを学び、知肢併置校、センター的機能を果たす特別支援学校として必要な専門的指導力の向上に関する研修を行う。

ア　「校内講師による全体研修」…㋓

○　専門的指導力の向上を図るための基礎的内容。

○　講師は、校内の専門知識をもつ人材に依頼。

○　方法・内容としては、新転任者研修、障がいや指導法に関するグループ討議、進路や特別支援教育コーディネーターのことを共通理解するための研修など。

イ　専門的指導力の向上に関する研修…㋔

○　職員のニーズや専門的指導力の向上のため本校に必要と思われるより専門的な内容について研修会を実施する。

○　講師を校外から招聘したり、校内の専門の知識をもつ人材を活用したりする。

○　特別支援教育推進支援事業による「特別支援学校専門性向上研修」については、地域のセンター的役割を果たすための取組の一つであり、校外からの参加者もあるため長期休業中に実施する。

ウ　「オープンクラス（校内公開授業)」・「他学部授業参観」(… ㋕）の設定

研究の成果・検証としての授業実践を広く校内職員に公開することによって、改善の場とするとともに学部間の連携を図る（オープンクラス)。

また、他学部の授業を自由に参観できる機会を設け、より一層学部間の連携を図る（他学部授業参観)。

エ　その他

①　各校務分掌部が実施する研修についても、必要に応じて協力する。

②　全体研修の内容や講師の選定については、研究との連携が取れたものとなるような努力を行うものとする。また全体研修・研究の意義を確認した上で、内容や場所の工夫を行い多くの職員の満足度を高める研究・研修に努める。

２　班別研究（…㋑）について

班別研究において表１のような研究副題を設定し、それぞれ研究に取り組んだ。

表１：各班の研究・研修の内容

班	研究副題
小学部研究班	『子どもが「もう１度やりたい」と思う授業づくり ～自主性とかかわり合う力の育成を目指して～』
中学部研究班	『生徒一人ひとりが進んで取り組む授業つくりを目指して』
高等部研究班	『生徒の実態に合った効果的な課題別学習のあり方 ～新教育課程の創設と移行を目指して～ 』
訪問教育学級研究班 （２４年度まで）	『学齢超過生の教育から生涯教育への展望』
寄宿舎研究班	『生活能力を高める支援の在り方はどうあればよいか ～自立に向けての指導～』

３　全体研究会（…㋒）について

全体研究会として、研究の見通しを確認することや各研究班の１年間の取組の報告を行った。各班の情報交換を行うと共に研究・研修の成果を共有する場とした。

また、「研究のまとめ」を作成し、研究内容・方法の継続と積み上げを図る。

Ⅶ　研究計画

（ア）研究の期間

本研究は、平成２４年度から平成２６年度までの３カ年で取り組む。

研究の概要
『共に生きる力』を育むための「授業づくり（支援のあり方の改善)」を考え、実践するものとする。 具体的には、昨年度、各研究班において見直し・改善を行った教育課程の試行とその授業検証を行う。また、授業研究の行い方や発達障がいの特性の理解、必要に応じた支援のできる実践的指導力と専門性の向上を図ることを目的とした研修を行う。

（イ）研究の進め方についての確認事項

a　「スクラップ　アンド　ビルド」と「業務のシステム化」

研究成果を実現するための取組には様々な方法・手段があると思われるが、その全てを実現することは時間や予算面から厳しい面がある。また我々の職場では、事業間の調整がうまくいかなかったり、時間も含めたコスト意識が欠如したりしたために、文書や業務が増えていくことがよくある。そのようなことが起こらないよう、「スクラップ　アンド　ビルド（たとえば新しいことを始めるときには、同時に従来のものを整理したり廃止したりすることを検討する)」と「業務のシステム化（様式のみの設定ではなく、いつ、どこで、誰が、何を行うのかを定める)」をキーワードとして研究の計画や実施にあたりたい。

b　研究の進め方についての共通理解事項

組織が大きく、職員数が多い本校において研究を円滑に進めるために下記のことについて共通理解を図った。

①　学校（職員）全体で取り組み、研究において立場は対等であること。
②　討論は自由であり、意見は代案をもった建設的な「改善案」であること。
③　結論を全体の総意とすること。
④　解決方法が具体的で明確にだせること（～したい、で終わらない)。

Ⅶ　研究・研修の経過

表２に示した期日や内容で、本年度の研究を行った。

また、表３に示した期日や内容で、本年度の各種研修を行った。

表２《平成２５年度 研究の経過》

日 付	研　究　内 容	備 考
４／　５（金）	研究推進委員会（１）『本年度の研究全般について』	
４／１９（金）	全体研究会（１）『本年度の研究概要説明』	
４／２５（木）	班別研究（１）　小・中・高	
５／１７（金）	班別研究（２）　小・中・高	
５／２２（水）	班別研究（３）　小・中・高	
５／２９（水）	班別研究（４）　小・中・高	
６／　７（金）	班別研究（５）　小・中・高	
６／１４（金）	班別研究（６）　小・中	高等部は現場実習準備
７／　５（金）	班別研究（７）　小・中・高	
７／１９（金）	班別研究（８）　小・中・高	
７／２２（月）	班別研究（９）　小・中・高	
８／２２（木）	研究推進委員会（２）『各班の経過報告と方向性確認』	
８／２２（木）	班別研究（１０）　小・中・高	
８／２３（金）	班別研究（１１）　小・中・高	
８／２８（木）	班別研究（１２）（１３）　小・中・高	
９／　６（金）	班別研究（１４）　小・中・高	
９／１３（金）	班別研究（１５）　小・中・高	
９／１９（木）	班別研究（１６）　小・中・高	
９／２７（金）	班別研究（１７）（１８）　小・中・高	
１０／　４（金）	班別研究（１９）（２０）　小・中・高	
１０／２５（金）	班別研究（２１）（２２）　小・中・高	
１１／　８（金）	班別研究（２２）　小・中・高	
１１／１３（水）	班別研究（２３）　小・中・高	
１１／１９（火）	班別研究（２４）　小・中・高	
１２／　３（火）	班別研究（２５）　小・中	高等部は現場実習準備
１２／２５（水）	班別研究（２６）　小・中・高	
１／１０（金）	班別研究（２７）（２８）　小・中・高	
１／１７（金）	班別研究（２９）　小・中・高	
２／　７（金）	班別研究（３０）　小・中・高	
２／２１（金）	全体研究会（２）『全体報告会』	

※　勤務体制の違いから、寄宿舎研究班は別途計画に従い、研究を行った。

表３《平成２５年度 研修の経過（研究部主催の研修)》

日 付	研　究　内 容	備 考
７／　５（金）	『進路支援に関する基本情報と演習』 講師：本校進路指導主事　真田匡業　教諭	
７／３０（火）	第６回　宮崎県特別支援教育研究連合 知的障がい教育研究部会研究大会 大会テーマ 『特別支援教育における 専門的指導力の向上を目指して』	県特研連知的部会主催 会場：本校 新食堂・旧食堂
７／３１（水）	特別支援教育エリアサポート構築事業 特別支援学校専門性向上研修 『発達障がいのある子どもの 思春期における不安定さにどう対応するか」 講師：独立行政法人国立病院機構宮崎東病院 児童精神科・心療内科　赤松馨 医師	
８／２１（水）	『合わせた指導について』 講師：宮崎県教育研修センター　落合雅暢　指導主事	
１０／　４（金） １０／２５（金）	『指導助言を得ながらの事例研究（各学部別)』 講師：本校　足立明彦　指導教諭	

平成２５年度　小学部研究班

１　小学部研究副題

『子どもが「もう１度やりたい」と思う授業づくり～自主性とかかわり合う力の育成を目指して～』

２　副題設定の理由

小学部では、子どもたちがよりよい自立と社会参加を目指すためには何が必要かについて、キャリア教育の視点から研究を進めてきた。その研究をとおし、小学部段階にある子どもたちにおいては、何かに取り組み「やった！できたぞ！」「またやってみたい！」という達成感をたくさん味わわせることが大切だということを確認した。その達成感の上に、勤労観・職業観と積み上げられ育っていくと考えた（図１）。

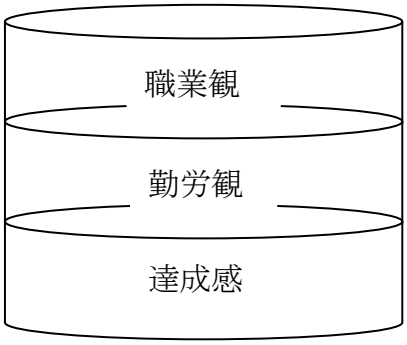


図１：小学部における達成感・勤労観・職業観

「できた！またやってみたい！」という気持ちを育てることは、自主的活動のできる子どもたちを育成することである。そこで、小学部の授業づくりのポイントとして「子どもたちが楽しんで取り組める」ということをキーワードとして授業改善に取り組んできた。これまでの研究をとおして子どもたちが興味･関心を示し､自主的に取り組めるように工夫していくことが大切だということがわかった。しかし一方では、楽しませるだけでいいのか、子どもたちの将来の生活につながる、小学部段階からつけておきたい力とは何があるのかについては十分な検討ができていなかった。そこで今回の研究では、まず現在の小学部の課題はどこにあるのかを話し合い、下記のような課題が浮かびあがった。

○現在の小学部の子どもたちは教師とのかかわりを楽しむ力はある反面、子ども同士でかかわり合おうとする姿は少なくうまくかかわれないことがある。

○学習活動がクラスの中だけで完結してしまいがちである。クラスを越えた取組を行い活動集団に変化をもたせることで、子どもたち同士の関係づくりが活発にできるようになるのではないか。

○成功経験が少ないことなどにより、自主的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないところがある。

このような課題を解決するために､自主的に活動に取り組む力､友だち同士で関わる力を育成し、子どもが「もう１度やりたい」と感じられるような授業づくりを検討・実践していくことにした。そうすることで、児童が楽しみながらも、それぞれの目標達成に向けて意欲的に活動できるようになるのではないかと考えこの副題を設定した。

３　研究仮説

自主的に活動に取り組む力、友だち同士でかかわる力を育成することで、子どもが「もう１度やりたい」と感じる授業づくりができるのではないか。

４　研究の方法

学年を基本とした４つのグループに分かれて授業づくりに取り組んだ。それぞれの単元については以下の通りである。

１年グループ：「夏を楽しもう」　　２,３年グループ：「つくってあそぼう～動物園～」
４,５年グループ：「みんなで遊ぼう」　　６年グループ：「修学旅行に行こう」

５　研究の内容

各グループのまとめは以下のとおりである。

（１）１年グループ研究

ア　単元名「夏を楽しもう」（感覚遊び・水遊び）

イ　目標

自主的に活動に取り組む力についての目標

１組：約束を守って活動に参加することができる。
２組：水遊びをとおして、集団の中で活動することに慣れることができる。
３組：教師と一緒に活動することで、感触・水遊びに慣れる。

友だち同士でかかわる力についての目標

１組：水遊びをとおして、みんなで一緒に活動することの楽しさを味わうことができる。
２組：先生や友だちと一緒に水遊びを楽しむことができる。
３組：集団の中で泣かずに落ち着いて参加できる。

ウ　研究の実際

①　児童の実態及び単元設定の理由

違った環境で過ごしていた児童が本校に入学し、これまでとは違った集団で活動が始まった。入学当初は、生活に見通しがもてないことや、周りとの関係がまだできていなかったため、児童の表情は硬く、涙を流すなど、授業への参加が難しい場面も多く見られた。入学から２ヶ月経ち、各学級の学習集団に慣れたことや、毎朝学年合同で行われる朝の会をとおして、他の学級の児童や教師に対しても、少しずつ意識し始めた段階でこの単元を実施した。児童が好きな活動であり、どの段階の児童でも意欲的に参加できる『水遊び』を学習活動に取り入れることにした。グルーピングの仕方や環境設定により、児童の自主性やかかわり合いを引き出すことができるのではないかと考えこの単元を設定した。

②　授業の構成及び期間

活動内容	教材
色水遊び 水鉄砲遊び	皿、食紅、ひも、洗面器、クリップ、ペットボトル 水鉄砲、バスクリン、習字紙、パイプシャワー
ボディーペインティング	指絵具、皿
泡遊び	せっけん、泡立てネット、洗面器

③　手立てや工夫

（ア）　自主的な活動を引き出すための手立てや工夫

○　事前学習や毎回の活動の中で、イラストや写真、タイマー等を用い、「活動の流れ」「約束」について確認を行った。

○　見通しをもたせるために、同じ内容の活動を数回繰り返し行った。

○　児童の興味・関心がもてるおもちゃや手作り教材を用いて活動を行った。

○　教師がやって見せることで、自分もやってみたいという気持ちを引き出す。(モデリング)

（イ）　友だち同士でかかわり合う力を引き出すための手立てや工夫

○　クラスの枠を超えた数名の児童でグループを作り活動を行った。

○　一つの教材を共有して使う場面を設定した。

○　友だちと一緒に泡をたてたり、友だちの体に色を塗ったりする等、友だちと触れ合うことで活動が深まり、より楽しめるような活動内容・教材を準備した。

○　模範となる動きをする児童をクローズアップし教師が称賛することで、友だちを意識できるよう工夫した。

○　「貸して」や「ありがとう」等の言葉を意識してつかわせながら、児童同士のやり取りの仕方を学ばせた。

④　成果と課題

（ア）　同じ活動を繰り返し行ったことで、落ち着いて活動に参加できた。また、遊び込みができたことで、遊びが広がり、児童同士だけでも遊べる場面が多く見られた。

（イ）　学級の枠を超えて一緒に活動したことで、同じ学年の先生や友だちを「一緒に活動をする仲間」だと意識するようになった。水遊び以外の場面でも、安心して活動に取り組む姿が見られるようになってきた。

（ウ）　今後も学級の枠を超えた活動を継続して行っていきたい。

（２）２，３年グループ研究

ア　単元名　「つくってあそぼう～動物園～」

イ　目標

・同じ場で友だちと共通した素材を介して、友だちを意識しながら活動できる。

・友だちと協力して１つのものを作り上げる楽しさを味わう。

ウ　研究の内容

授業名	内容	時間
紙であそぼう	絵の具やマジック、スタンプを使ってみんなで大きな模造紙に描いた。	２時間
シーツで遊ぼう	絵の具を筆や手につけて大きな布に描いた。最後はみんな手形と足形をつけて完成させた。	２時間
どんな動物を知っているかな？	知っている動物の名前を発表し、Ｉpad を使って動物の画像と鳴き声を学習した。	１時間
動物園に行こう （事前学習・動物園への校外学習）	タブレットを使って、動物園のホームページを見ながら事前学習を行った。	６時間
動物園をつくろう	１　ダンボールで遊ぼう ２　ダンボールで動物園を作ろう ３　作った動物園で遊ぼう	６時間

実践の工夫点を以下に示す。

・　児童が興味のもてるような素材を活用する。

・　児童の実態に応じて活動内容を変えたり、グループを編成したりして、集団の中で個に応じた環境を作る。

・　Ｔ１とＴ２以下の役割分担を明確にし、教師の言葉かけや支援の精選をする。

エ　成果と課題（○は成果、●は課題）

①　自主的に活動に取り組む力について

○　個に応じた教材を用意したことで、様々な実態の児童がそれぞれに興味を示し活動に参加することができた。

○　楽しい雰囲気で活動できたことで、普段集団に参加できない児童も一緒に活動することができていた。

②　友だちとかかわる力について

○　友だち同士で話し合ったり協力したりする場面がたくさん見られた。

○　授業以外の場面でも友だちとの会話や遊びが増え､友だちが困っていると心配したり、けんかをしても自ら仲直りをしたりしてまた遊びだすなどという行動が増えてきた。

③　教師の言葉かけや支援の精選について

○　児童がよりＴ１に集中するようになり、児童同士で声をかけ合う場面が頻繁に見られるようになった。

●　教師の必要性の低い言葉かけや支援が、結果的に児童から自主的に出てくる言葉や動きを少なくしているのではないかと反省した。実態の違う一人一人の児童に合わせた本当に必要な支援とは何かをきちんと考えていかなければならないと感じた。

（３）４，５年グループ研究

ア　単元名「みんなで遊ぼう」

イ　目　標

○　活動の内容や仕方が分かり、楽しく活動に参加する（参加しようとする）ことができる。

○　活動をとおして児童同士が意識し合い、自然にかかわり合っていくことができる。

ウ　研究の内容

○　小学部４、５年生では毎週火曜日の５、６校時に以下に示すような合同学習を行ってきた。

６月 ７月	「ひっぱりっこ」 １対１でひもを引っ張りあって対戦し、トーナメント方式で優勝を決める活動。相手を意識することができ、児童にとって分かりやすい活動であるが、同じ児童が勝ち上がってしまうという難点があった。ひもを引っ張ることが難しい児童には、ひもの先に輪っかをつけたものを準備した。
９月 １０月 １１月	「たおしっこ」 台の上に自分の紙相撲を置き、１対１で対戦する紙相撲大会。台をたたくことが難しい児童には、ボタンを押すことで台に振動が伝わる装置を準備した。トーナメント方式で優勝を決めた。勝敗には偶然性があるので、同じ児童が勝ち上がることがない点ではよかった。９～１０月は、完全な個人戦で行ったが、１１月は学級への所属感、友だちへの仲間意識をもたせるために学級対抗のチーム戦で行った。

○　手立てと工夫

・　友だちのことを意識することができるような教材（顔写真等）を常時掲示したり、対戦の前後に握手をしたり、応援をしたりするなどの場を設定した。

・　「よびだし」「黒板掲示」「応援」などの係を設定し、児童に任せることで活動に参加しているという充実感をもたせるようにした。

・　「ひっぱりっこ」「たおしっこ」とも児童の実態に応じた教具を使用するようにして、すべての児童がしっかりと活動に参加できるようにした。

・　「ひっぱりっこ」「たおしっこ」とも対戦の仕方は基本的に変えないようにした。

①名前を呼ばれたら前に出る。

②お互い握手をする。

③対戦前の歌を歌う。

④対戦する。

⑤握手をする。

このような流れを繰り返し行うことで、児童に活動の見通しや参加意識をもたせるようにした。

エ　成果と課題

○　基本的な流れの繰り返しにより、活動の仕方が分かり、意欲をもって取り組む様子が見られるようになった。勝ちたいという意欲をもったり、勝ったときに喜びを感じたり、負けを受け入れることができるようになってきた児童もいた。

○　係の設定は対戦以外にも積極的に活動に取り組むよいきっかけになった。児童によって

はお手伝いや任された仕事をすることで、活動への充実感が得られたようだった。

- ● 「たおしっこ」では学級への所属感を高めるためにチーム戦を行った。チームのことを意識することができた児童もいれば、チームの勝敗というところに気付くことが難しかった児童もいた。協力し合う活動を取り入れるなどの工夫が必要だったかもしれない。
- ○ 活動を続けていく中で、児童同士がお互いに意識し合うようになり、校外学習や宿泊学習等で児童同士のかかわりがたくさん見られるようになった。

（4） 6年グループ研究

ア　単元名「修学旅行に行こう」

イ　目標

・　修学旅行までの学習をとおして、一緒に活動する友だちを意識しながら行動したり自分からかかわったりすることができるようになる。

・　修学旅行までの学習をとおして、様々な活動に見通しをもって落ち着いて過ごすことができるようになるとともに、自主的に行動をすることができるようになる。

ウ　研究の内容

修学旅行を見通し、決められた約束やルールの中で「自主的に活動に取り組む力」と「友だちとかかわる力」を高めるために、以下のとおり学習計画を立てて実践研究を行った。

月	学　習　計　画		実　施　日
5月	○　校外での児童の実態を知る活動 ・買い物学習（マルミヤ）：おやつ ・5月誕生会：レストランでの過ごし方（ジョイフル）	「きまりを守って歩こう」（年間をとおして実施）	・5月　2日（木） ・5月23日（木）
6月	○歓鯨館へ行こう～入浴の仕方、バスの乗り方		・6月28日（金）
7月	○買い物学習（マルミヤ）：カレーの材料 ○1学期おたのしみ会		・7月　2日（火） ・7月24日（水）
9月	○9月誕生会（ピッコロ）：バウムクーヘン購入 ○宮交シティーへ行こう：電車の乗り方、買い物の仕方、レストランの過ごし方 ○修学旅行に行こう：日程、荷物確認、係決め、ホテルでの過ごし方、修学旅行のおやつ購入（マルミヤ）		・9月　5日（木） ・9月19日（木） ・9月24日（火） ・9月25日（水） ・9月26日（木）
10月	○修学旅行：出発式、帰校式、当日の活動 事後学習		・10月3･4日（木・金） ・10月8日（火）

なお、具体的な手立てを以下に示す。

・　ペア（毎回同じ：修学旅行で同室の児童）の確認をし、自分の相手を意識させる。

・　授業の始めにめあてや自分の仕事の確認を行う。また、必ず学習の振り返りを行い、自己評価をする機会を設ける。自主的な活動や友だちを意識した活動が見られたら称賛を行う。

・　活動の見通しをもたせ、自主的な活動を促すために、障がいの特性に応じた視覚的支援や教材・教具を準備する。

・　一人一役で自分の仕事を意識させ、責任をもって活動するようにする。

エ　成果と課題

○　同じペアで繰り返し学習してきたことで、ペアの友だちを意識し、共に行動しようとする姿が見られるようになった。

○　決まりや活動の流れを確認し、それに応じた視覚的支援を用いることで見通しをもつことができ、自主的に活動したり、落ち着いて活動しようとしたりする態度につながった。

○　「決まりを守って歩こう」「歓鯨館へ行こう」「宮交シティーへ行こう」「修学旅行へ行こ

う」などの学習ごとに、個々の児童の目標と手立てを考え事後に反省をしたことは、個を見つめ指導を見直す機会になった。

- 友だちとかかわる力を広げるために異学年の友だちとの交流を図る機会を継続的に設ける。

６　研究のまとめと今後の課題

（１）　平成２５年度のまとめ

グループごとの研究の発表会を行い、学部職員全員で成果を確認することができた。他のグループのまとめを聞くことで互いに刺激になり、何をどのように取り組んできたのかを理解することができた。その中で、各グループの研究の成果をまとめると「子どもがもう１度やりたいと思う授業づくりのポイント」は以下のようになった。

☆「自主的に活動に取り組む力」を育てるポイント
- 見通しをもたせる工夫
- 興味のもてる教材、題材や個に応じた教材の提示
- 役割の設定

☆「友だち同士でかかわる力」を育てるポイント
- 友だちを意識できるような教材の提示
- 協力し合える場面設定
- 集団構成の工夫

☆「自主的に活動に取り組む力」・「友だち同士でかかわる力」に共通するポイント
- 繰り返しの活動であること
- 楽しい雰囲気づくり
- 児童への言葉かけや支援の精選

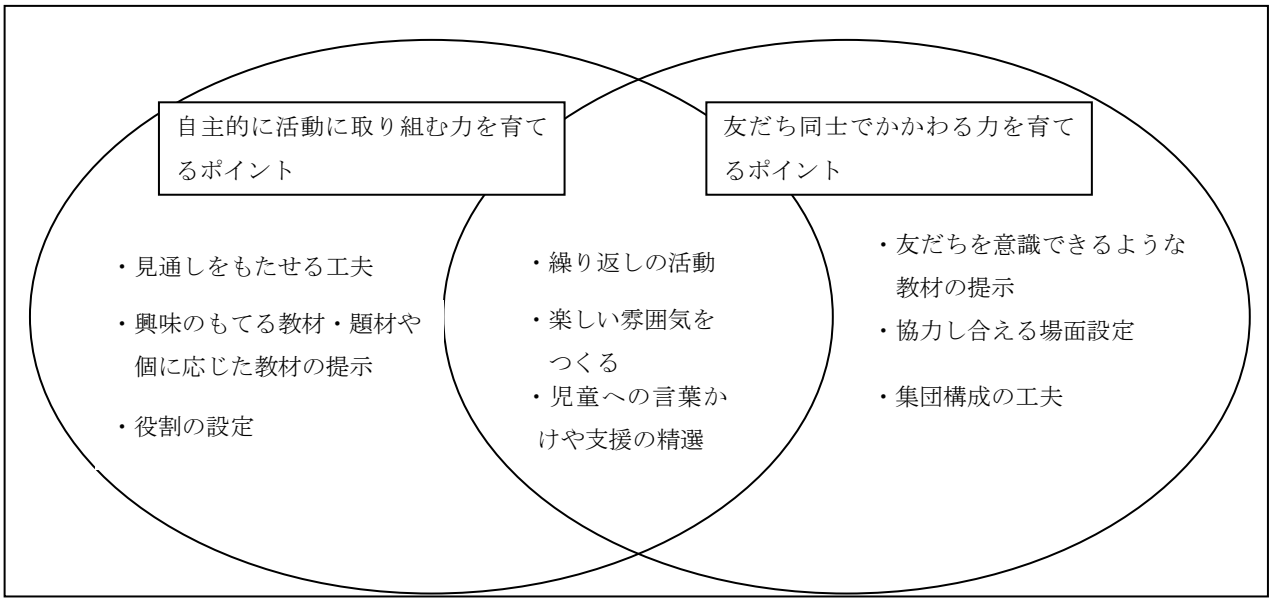


図２　子どもがもう一度やりたいと思う授業作りのポイント

（２） 今後の課題と来年度の方向性

今年度の取組をとおして、「子どもがもう一度やりたいと思う授業づくりのポイント」を整理することができた。職員の感想の中には、「実際の授業づくりについて具体的に話し合いをしながら、学年グループで協力できた」「授業づくりをとおして、自分のクラス以外の児童の実態を知る機会にもつながった」などの意見が多くあがった。

今後の課題としては、「自主的に活動に取り組む力」「友だち同士でかかわる力」を育成していくことを基本に、今年度の学年グループでの取組をどのように学部全体に広げていくのかを考えていく必要がある。来年度の方向性について、小学部職員で話し合ったところ、学年グループから異学年へのひろがりをもたせることができるような取組を行いたいという意見が多かった。来年度は、学年グループを基本にしながらも、異学年とのかかわりを視野に入れた授業づくりを目指していくことができればよいのではないかと考えている。

平成２５年度　中学部研究班

１　中学部研究副題

『生徒一人ひとりが進んで取り組む授業つくりを目指して』

２　研究副題設定の理由

中学部では、小学部で積み上げてきた様々な力を、『働く場』や『生活の場』において、変化に対応する力、般化できる力を高めていく時期ととらえ、これまでキャリア教育の視点に立った学習内容の改善・充実を目指して研究を進めてきた。平成２１、２２年度は「しんろ学習」の充実について研究を進め、さらに平成２３年度は、それ以外の教育活動全体においても、生徒がより自信をもって学習活動に取り組めるように検証した。そしてそれらを受けて、昨年度は、各教科や教科・領域の目標や指導内容の明確化、系統的な学習展開を目指して、年間指導計画の見直しや精選を行った。

そこで今年度は、これまでに整理してきた年間指導計画をもとに、教師一人ひとりが授業実践に取り組み、検証をしていきたいと考えた。またそれと同時に、計画的な事例研や必要に応じたグループごとの協議をおこない、学年や教科・領域など様々な場で活動に取り組む生徒一人ひとりに目を向け、授業形態の在り方やそのグループにおいての目標や指導内容について、より具体的な指導の方法について研究を進めたいと考えた。そうすることで、たくさんの視点からの改善のポイントが浮かび上がり、よりよい授業の在り方や授業つくりに結びついていくのではないかと考えた。これは、現在の中学部生徒の障がいの多様化、複雑化に伴い、職員からのニーズが高いものでもあった。生徒一人ひとりが意欲的に取り組める、より実践的な授業の在り方や、生徒の実態を理解し、それを様々な教育の場に生かしていく取り組みなどの情報交換、意見交換を行うことで、適切な支援や指導ができ、それが授業に進んで取り組む生徒の育成を図ることにつながるのではないかと考え、研究を進めた。

３　研究の仮説

昨年度までに見直しや精選を行ってきた年間指導計画を元に授業実践をし、それを検証することで、生徒一人ひとりがより進んで取り組む授業作りの充実が図れるのではないか。

また、学年、教科・領域などの様々なグループで、生徒一人ひとりの実態や課題点、目標などについて協議を深めることによって、適切な支援の在り方を探ったり、共通理解を深めたりでき、よりよい学習環境を作ることができるのではないか。そしてそれが生徒の学習意欲を高めることになり、授業に意欲的に取り組む生徒の育成が図れるのではないか。

４　研究の方法

<table>
<tr><th>個人研究班</th><th colspan="2">グループ別研究班</th></tr>
<tr><td rowspan="2">・生活単元学習
・総合的な学習の時間
＊　ひとり１単元の授業を実践し、検証する。
（Ｔ２以下の職員の意見も集約する。）</td><td>学年グループ</td><td>作業学習グループ</td></tr>
<tr><td>・第１学年
・第２学年
・第３学年</td><td>・農業班
・家庭班
・窯業班
・生活班</td></tr>
</table>

５　研究の内容

（１）１学年研究班

ア　研究のねらい

本学年は、男子１３名、女子６名、計１９名の生徒で構成されている。ある程度の理解力が期待できる生徒が多く、比較的実態差が少ない学年であるといえるが、以下の困難さから、学級という小集団での学習は可能であるが、学年での合同学習が難しい状態であった。

○　集団での学習の経験が乏しく、順番を待つことが難しい

○　衝動性の高い行動が見られ、互いに刺激を受けやすい

○　生徒間のかかわり方に課題が見られる

よって本研究においては、『集団の中で落ち着いて授業に取り組むことができる』ということをねらいとして設定することとした。

イ　研究の内容

（ア）各学級での取組

・実態把握 … 具体的な事例を通して見えてきた個人の課題を学年で共通理解

・順番　　… 当番、係、発表、移動教室等、順番を決めて視覚的に提示

・評価　　… 個々の目標設定と毎日の評価

（イ）学年での取組

・美術　　… 視覚的に分かり易い、片付けの手順表の活用

・ルール作り　…「静かに聞く・手を挙げて発表・注意は先生」という簡潔で肯定的なルールの徹底

・環境整備　　… 黒板や座席の配置、分かり易い授業の流れの工夫

・リーダーの育成 … モデルとなる生徒が積極的に前に出る場面の設定

・生活単元学習　… 「雨の日の過ごし方」や人権学習等を通した生徒間の好ましいかかわり方の学習

・保健体育　　… ゲームを通したリーダーシップやメンバーシップの育成

ウ　成果と課題

（ア）成果

○　様々な場面で順番を決め、視覚支援を行ったり合同学習でのルールをその都度確認したりしながら継続して取り組んできたことで、順番を守ることができ、落ち着いて学習に取り組むことができるようになった。

○　学習環境を整備することで刺激し合う環境が大幅に減少し、さらに、モデルとなる生徒を見る機会が増えたことで意識が高まり、落ち着いて学習に取り組むことができるようになった。

○　生活単元学習で生徒間のかかわり方について重点的に学習したり、スポーツを通してリーダーシップやメンバーシップの育成を図ったりしことで、徐々にかかわり方が身に付いてきている。

（イ）課題

個々の生徒を見るとまだまだ好ましいかかわり方に課題をもつ生徒が多く、それぞれの特性を踏まえつつ、ソーシャルスキルトレーニング等を通して学年全体で指導していく必要がある。

（２）２学年研究班

ア　研究のねらい

２学年は男子１４名、女子９名、計２３名という人数の多い学年で、そのうち重複学級生徒が９名である。実態差も大きく、学年全体で授業を行う時に、内容によっては集団のどこに焦点をあてて授業を進めるのか、また人数に対して場所が狭く、そこにたくさんの人がいるという環境で落ち着かない生徒がいる、など様々な問題があった。

研究を始めるにあたり、まず各学級の実態について報告し合い、通常学級と重複学級では早急に取り組むべき課題が異なるということで、それぞれグループに分かれて検討することとなった。

通常学級では、国語、数学の教科学習について、昨年度までは学級ごとの指導を行っていたが、今年度習熟度別のグループでの学習を取り入れたので、それについての実践と検証を行うことにした。

重複学級では、重複学級グループという小集団での授業形態をとることで、指導の充実が図れるのではないかと考え、実践、検証を行うことにした。

イ　研究の内容

①　通常学級班

（ア）研究のねらい

本研究グループの生徒は、中学部２年生１４人で３学級に編制して学校生活を送っている。生徒の教科学習の実態は、小説などを愛読したり、一人で買い物をしたりする生徒からひらがなの読み書きや数の概念を学習している生徒と幅広い。昨年度は、学級毎に国語と数学の指導を行ってきたが一人ひとりのニーズに応じながら個に応じた指導を行うことが難しいことが課題としてあげられた。

そこで今年度は国語と数学を実態に合わせて３つのグループに分けて指導を行い、一人ひとりのニーズに応じたきめ細やかな指導を充実させることをねらいとした。

（イ）研究の内容

本研究ではまず、国語と数学の習熟度別に生徒を３つのグループに分けて、指導に当たる上で個別の指導計画を教科担任全員で読み合わせて目標の確認を行った。各グループの教科担任は個別の指導計画の目標をもとに授業を行い、それぞれの学習課題に応じた教材研究に取り組んだ。

また教科会を設け、各グループの指導内容と方法、成果と課題について全員で共通理解を図り、指導の充実につなげた。同時に、来年度のグループ再編制についての協議を行った。

（ウ）成果と課題

○　習熟度別のグループ編制をすることによって、グループ内の生徒の達成度がほぼ同等となり、全員でひとつの内容で授業ができた。それによって、友だちの意見をたくさん聞く機会が増えた。また、苦手な教科でも、友だちと一緒に挑戦しようとする意欲が高まったりする様子が見られた。

○　学級内での教科学習だと、学力の差が大きく、生徒一人ひとりの課題や達成度が見えづらくなってしまいがちだが、グループ別での学習を行うことで、それぞれの実態やニーズに沿った支援や指導ができた。

- ３グループ編制で学習を進めたが、実際には実態に幅のあるグループもあった。来年度に向けて、その生徒の意欲を保ちながら、学力も高める授業の在り方やグループ編制について検討が必要である。
- 学級が分散したことで、学級担任が学習内容を充分把握することが難しい場面があり、学んだことを学校生活の場で生かしきれないことがあった。学習内容を共通理解する方法を確立する必要がある。
- より個に応じた支援・指導をするための教材・教具の工夫が必要である。

グループごとの学習課題	学習内容および活動	教材
国語Ⅰ ・ひらがなの読み書きや聞く力、話す力を育てる学習を主としたグループ	・目と手の協応動作、形の認知と弁別 ・聴覚弁別と音読 ・ひらがなの書き方　・カタカナの書き方 ・ひらがなカルタ ・しりとり	・点つなぎ、形の模写プリント ・絵カード ・自作学習プリント ・カルタ ・しりとりプリント
国語Ⅱ ・文章の読み取りや文の作り方、漢字の読み書きなど、日常生活に必要な国語の力を育てる学習を主としたグループ	・物語、詩、作文などの文章の音読、読解 ・日常生活で使う漢字の読み書き （小学２年～３年生程度の漢字） ・簡単な文章の成り立ちや決まり、書き方 （小学２年程度の内容） ・作文や詩の創作や発表	・教科書(国語４)などの例文 ・漢字練習プリント ・漢字練習ノート ・文章問題プリント ・教科書などの例文や問題 ・自作の作文や詩、例文
国語Ⅲ ・国語の基礎知識を身に付け、自分の考えを表現したり、他者の考えを受容したりする力を育てたりしながら、生活の中で活用できる力を育てる学習を主としたグループ	○詩・生活作文・俳句 ○ことわざ ○ことばの学習（音と訓、ことばあつめ、丁寧語、動詞、形容詞、反対語、接続助詞・副助詞、連用修飾語、助動詞）	・ゆっくり学ぶ子のための国語３，４ ・学習プリント
数学Ⅰ ・数の概念を学習し、生活の中で活用できる力を育てる学習を主としたグループ	○数唱 ○点つなぎ ○数字のなぞり ○トランプゲーム ○時計の読み方 ○お金の数え方	・個別課題プリント ・絵本『すうじの絵本』 『かぞえることば』 ・トランプ ・お金
数学Ⅱ ・四則計算の習得を主とした学習グループ	○数と計算 ○量と測定 ○図形	・ゆっくり学ぶ子のためのさんすう
数学Ⅲ ・数学の基礎知識を身に付け、生活の中で活用できる力を育てるグループ	○数と計算 ○量と測定 ○図形と面積・容積 ○時刻と時間 ○速さ	・くらしに役立つ数学 ・ワークシート

②　重複学級班

（ア）研究のねらい

２年重複学級の生徒の実態として、長時間の着席や特定の生徒の声が苦手だったり、集団での活動の際、その環境で落ち着かなかったりということがある。一方、保護者の願いとして、集団の中でも落ち着いて過ごせるようになってほしいというものがあり、また生徒の中には他の生徒の行動を手がかりにして動く生徒もいる。

そこで重複学級グループ研究班では、学年に９名という人数を生かし、学年全体という大集団でもなく、また学級個々よりも他との関わりの多い、小集団での学習を行うことにした。重複学級だけの生徒の集団なので実態差もさほど開かず、授業の内容、進度をより実態に合わせられ、その中にお楽しみ的な活動を入れることで、集団に対して良い印象を与えられるのではないかと考えた。

（イ）研究の内容

○　夏休みの思い出

個々の夏休みの絵日記をプロジェクターで大きく映し、みんなで鑑賞することにより、夏休みの思い出をグループで共有する。その後、みんなで飲み物を作って飲み、２学期も頑張ろうという雰囲気を作る。

・ 個々の待ち時間が少なく、集中が持続した。
・ ゆっくりした流れで、最後まで楽しい雰囲気で進んだ。

○　秋の暮らし（焼き芋体験）

芋掘り→落ち葉集め→芋の準備→焼き芋→試食、ミニカフェ体験

・小集団、しかも屋外での活動だったので、ゆったりとした環境での学習となった。
・落ち着いた環境なので、集中でき、説明をよく理解しているようだった。
・個々の生徒の発言や行動を待つことができた。（学年全体だとどうしても通常学級の生徒の発言で授業が進んでしまいがちになる。）
・実態の近い集団なので、それに合った活動内容を準備しやすかった。
・他の生徒の行動を手がかりにして、自分から動く生徒もいた。

（ウ）成果と課題

これまで中学部では、生活単元学習や総合的な学習の時間は学年全体で行うことが多かった。他の生徒の考えを知ることができたり、授業が活発になったりなど、集団で学習することのメリットは大きかったが、人数が多く、実態差の大きい集団ではデメリットとなることもでてきた。今回、重複学級グループでの学習を計画、実施することで授業形態のバリエーションを一つ増やすことができたと思う。

今後、生活単元学習や総合的な学習の時間の学習内容によって、どのような授業形態をとるのがベストなのか、学年全体なのか、学級個々なのか、通常学級・重複学級という二つのグループなのか、またはもっと実態に応じた弾力的なグループ編制をするかなど、検討する必要がある。

ウ　成果と課題

学年での研究を通常学級、重複学級の二つに分けたことで、それぞれの課題に合った研究を進めることができた。教科学習や生活単元学習、総合的な学習の時間などは日々実践しながら改善を図っていくものであるが、学級の枠をこえた編制になると、なかなか打ち合わせ

の時間がとれず、Ｔ１の教師にお任せということになってしまう。今回、研究で取り組むことにより、その時間が確保され、より深い学習内容の検討ができたと思う。また、重複学級グループとしては、大集団でもなく、学級個々でもない、学習活動に適した人数の集団で学習することにより、生徒の実態に合っていて、なおかつスケールの大きい活動を実践することができた。

今後の課題としては、今年度、研究の時間を利用してできた職員間の共通理解や打ち合わせの時間をどう確保していくかということであろう。また、生活単元学習や総合的な学習の時間などの授業形態については、個人研究班で行った授業実践、検証の結果も踏まえながら、整理していく必要がある。

（３）中学部３年研究班

ア　研究のねらい

中学部第３学年は男子１２名、女子３名で構成され、学校生活全般において特にコミュニケーションに課題の見られる生徒が６名在籍している。それぞれの課題を改善していくことは、本人だけでなく関わりのある人々にとってもより豊かな生活に結びつくと考えた。そこで本年度はこの６名に焦点をあて、教育活動全体を通して支援の手立てを工夫・改善することで、自立と社会参加に向けた心豊かでたくましく生きる生徒の育成を目指すこととした。

イ　研究の内容

コミュニケーションにおける共通した課題として「意思表示」があげられる。そこで、次に挙げる手順で研究を進め、変容の見られた指導・支援については、学年における合同学習の時間においても継続して行うことで、本人の「意思表示力」の定着につなげることとした。

① 学年全体の実態把握
② 指導・支援の手立て確認
③ 学級での指導実践
④ 実践を受けての指導・支援の共通理解および共通実践
⑤ 対象生徒の変容確認

（ア）　指導の実際

対象生徒の意思表示に関する実態をみるとＡ「発語は明瞭であるが表出が困難（４名）」、Ｂ「発語が不明瞭（１名）」、Ｃ「発語なし（１名）」に大別できる。それぞれの手立ては資料１として添付する。すべてに通じるキーワードは「継続」である。

（イ）具体的な教材および指導場面

意思表示の課題には、生徒の心理的側面とスキル的側面があると思われる。心理的側面においては、生徒に自信を持たせるための環境作りと継続した指導が必要となるが、ここでは、スキルを高めるために効果的であった教材や指導場面を資料２として添付する。

ウ　成果と課題

「机上の工夫」について、カード添付は第１学年時より継続している取組であり、添付内容も実態に応じて変化させることで成果が見られた生徒もいる。マジックテープの活用も素材が移動しないことで、じっくりと触れることができ選択する様子が見られるようになった。「好きなキャラクターの活用」においても自らグッズを手にして話しかけたり、模倣したりしながら、発声の楽しさを感じ取っている様子が見られた。このことは主体的な表出につながっていると思われる。「抽出指導の充実」では、抽出指導をきっかけに学級において指導の手立てが明確になり、日常生活での継続指導に生かされている。

本研究をまとめる段階において、学年集団の中で対象生徒一人ひとりを見るとそれぞれに成長を感じ取ることができる。しかし、このことは学年職員が研究の積み重ねの中でそれぞれの生徒の実態を理解しているからこそ感じ取れることでもあり、今後、集団が大きくなった際に適切な意思表示に結びつくのかどうかを見据えながら指導にあたっていくことが課題といえる。

資料１

a　発語は明瞭であるが表出が困難な生徒

①　表出時の働きかけ(顔を上げる、相手を見る、ゆっくり話す etc)。

②　気持ちの切り替えの合図(言葉、サイン、表示)。

③　机上へのカード添付(課題、評価)。

④　明確な設問およびモデル(選択肢、定型文、対象者)。

⑤　失敗してもよい環境作り（間違えた際にも指摘は穏やかに）。

⑥　自分から話す機会の設定(関心事、挨拶、司会 etc)。

⑦　待つ雰囲気作り。

b　発語が不明瞭な生徒（自己決定が困難）

①　視覚に働きかける選択場面の設定。

②　抽出指導の充実。

③　意図的な不快事象の設定。

④　発問の仕方の工夫(表情を見せずに問いかける)。

c　発語のない生徒(重複障害、関心を広げる段階、定点での教材活用が困難)

①　いろいろな人との関わりを積極的に設定。

②　時間にとらわれない活動時間の確保(関心事象の広がり）。

③　選択場面の設定（主体的な選択）。

資料２

a　机上の工夫

①　実態に応じたカードを常設し、場面に応じて活用している（写真１）。

②　生徒Ｃには、マジックテープを添付し、複数の素材を提示するなかで選択場面を設定している（写真２）。

b　好きなキャラクターの活用

①　関心のあるキャラクターを活用し、音声に関する意識を高めている。

(a) 音声を変調して模倣し、踊るグッズの活用（写真３)。

(b) 口を開けることを意識させるグッズ（写真４)。

c　選択場面の工夫（生徒Ｃ限定）

①　活動場所・教材について選択できる場面を設定している。

(a) 車いす、椅子、床から活動場所を選択。

(b) ネットから複数の教材をつるして提示（写真５)。

d 抽出指導の充実

①　月に１、２回程度、抽出で構音指導を実施し、発声に伴う基礎作りに取り組んでいる。

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

（４）作業学習研究班

ア　研究のねらい

中学部の教育課程では週６時間、農業、家庭、生活、窯業の４つの班に分かれて作業学習を実施している。それぞれの作業担当主任を中心に中学部全職員で指導に当たっているが、打ち合わせの時間もなかなかとれないのが現状であり、計画、準備、評価までもが作業担当主任に任せきりになってしまっている。教育課程の中で大きなウェイトを占める領域でありながら、研究課題として取り上げられずにいたことはこれまでにも話題にあがっていた。

そこで今回、「実用的な研究」をという研究部の方針を受け、研究の時間を使って各作業班でじっくりと話し合いをすることで、それぞれの作業班の抱える課題が見えてくるのではないかと考えた。実態把握の方法であったり、教材・教具の準備であったり、作業班によってニーズは様々ではあるが、作業班で集まって話し合う機会をもち、授業実践していくことで、中学部研究のテーマである授業づくりにつなげていくことをねらいとした。

イ　研究の内容

①　農業班

（ア）研究のねらい

中学部農業班は、現在、生徒４～５名の３グループに各２名の職員が指導に当たりながら作業活動に取り組んでいる。活動中は、１対１もしくは１対２～３名で指導に当たりながら学習活動を行っている。ただし、指導に当たる職員が曜日によって代わる等、他のグループの生徒に対しては、共通した意識のもと指導・支援がなされていなかったりするという課題もあげられてきた。また、毎時間、活動内容が変わるという作業種目（農業）の特性から、生徒の具体的な目標の設定が難しいという意見もあげられてきた。

そこで各生徒の実態把握のもと、全職員がどの生徒に対しても同じように支援が行えるようにすることをねらいとした。

（イ）研究の内容

○　生徒一人ひとりの取組状況や課題、目標や支援方法の検討と職員間の共通理解を図る。

○　生徒一人ひとりの目標確認と評価の機会を学習活動の初めと終わりに毎時間設ける。

○　必要に応じて目標の変更を検討し、上記の時間に生徒へ提示する。

（ウ）成果と課題

○　生徒一人ひとりの取組状況や課題、目標や支援方法を全職員で検討することで優先すべき課題や具体的な目標を選定や、より有効な支援方法を模索することができた。また、職員間で共通理解を図ることができ、担当職員が代わっても同じように支援に当たることができた。

○　生徒一人ひとりの目標確認と評価の機会を学習活動の初めと終わりに毎時間設けることで、生徒の目標への意識が高まり、取組状況の変化も見られ、自己評価の機会にもつながった。また、職員が各生徒の目標を再確認する機会にもなり、高い意識をもって指導に当たることができた。

○　目標達成等に伴って目標の変更を検討したことで、生徒の様々な力を伸ばすことができた。

- 技能面の目標が必要な生徒もいるが、作業種目（農業）の特性から毎時間の活動内容が変わることで作業態度に関する目標にせざるをえなかった。また、活動内容によっては目標に対する取り組ませ方や有効な支援方法の選択が難しい場面が見られた。
- 活動内容によっては、目標達成のために他教科（数学等）での補充・補完の学習機会の設定を行う必要があった。
- 共通理解を行うための時間設定が難しい。

②　家庭班

（ア）研究のねらい

家庭班の活動内容は大きく「縫い物」と「調理」に分けられるが、中心的な活動である「縫い物」についての研究を進めた。

将来の職業として捉えると、規格通りに製品を作り上げることは大切なことであるが、中学部の作業では、その前段階として「基本的な縫い物の技能・安全な用具の取り扱い・作り上げる喜び」を身に付けさせたいと考え、作業に取り組ませている。

そこで、生徒一人ひとりの技能面の向上を目指すと共に、生徒の意欲を高める教材やグループ編制についての研究を進めることとした。

（イ）研究の内容

○　生徒の取組状況や課題の確認、目標や支援方法の検討と職員間の共通理解
○　目標に沿ったグループ分け
○　生徒の意欲を高める教材作り

（ウ）成果と課題

○　生徒の取組状況や課題をＴ１以下担当職員全員の目で確認することで、個々の生徒の実態を十分に把握することができた。また、それぞれの目標に向けて、共通した支援を行えるように職員間の共通理解を図ることができた。
○　生徒の実態・目標に応じグループ分けを行った。
　a　キラキラ班 … 刺し子で花ふきんを縫う、アーティスト班。情緒の安定を図りつつ、ものつくりを目指す。
　b　バリバリ班 … 規格通りに製品を作り上げる、お仕事班。高等部縫製班の業務の一部を請け負う。まち針・しつけ・印つけ・ミシンの流れを１人で行う。
○　２つの班で活動することにより、それぞれの目指す姿が明確になったと共に、生徒自身にも目標を意識して活動する姿が見られた。
○　生徒の実態などを話す中で、一部の生徒が日頃の他の授業ではあまり見せない「笑顔」で、縫い物に取り組んでいることが分かった。縫い物をしながら、思わず笑顔になってしまうのである。今まで裁縫道具を持ったこともなく、技術的にも未熟であった生徒が、自分で糸を通し、自分で何かを作り上げる喜び。縫い目がそのまま生かされ表現される「刺し子」は、生徒の情緒を安定させる適切な教材であったと思われる。また、

【細かな縫い目の刺し子「花ふきん」】

縫い物体験が将来の余暇活動につながる可能性も感じられた。

● 生徒によっては、３時間着席して縫い物を続けることが難しい生徒もいる。今後生徒の実態に応じて、指先の細かな作業だけでなくより大きな動きのある活動を取り入れていく必要がある。

③ 生活班

（ア）研究のねらい

中学部生活班は、１年４名、２年４名、３年３名、計１１名の生徒で構成されている。

研究に先立ち、課題を検討したところ生徒間の実態差があることや他学年の実態把握が充分でないこと、作業場所の確保が難しいことなどが課題としてあげられた。

そこで本研究では、「生徒の課題を明確にし、共通理解を図ることで、生徒一人ひとりが進んで課題に取り組むことができる」授業づくりをねらいとした。

（イ）研究の内容

○ 個別の指導計画を基にした実態把握及び共通理解

○ 実態に応じたグループ編制

実態に応じて、A「他人と協力し、流れ作業を行う」、B「一つの作業を長く続ける」C「自分の課題を行う」３つのグループに分けて活動に取り組んだ。

○ 「作業学習評価表」の活用

（ウ）成果と課題

○ 職員間で全員の個別の指導計画を確認したことで課題が明確となり、適切な支援や指導につながった。

○ Ａグループでは、他者との協力や相手を思いやる気持ちを育むことができた。また、「できました」や「お願いします」などの言葉遣いを徹底させることで、仕事意識の向上につながった。集中して無言で作業に取り組める場面も増えた。

Ｂグループでは、リサイクルを中心に活動し、自ら効率よく活動できる方法を考えるなどして集中した活動が持続できるようになった。また、ペットボトルのキャップやラベルを剥がす活動に継続して取り組むことで、活動に応じた体の使い方ができるようになった生徒も多く見られた。

Ｃグループでは、生徒にあった教材教具を作成し、きめ細かな支援を行うことで生徒が自ら意欲的に取り組むことができた。また、支援を最小限に抑えることで生徒が自ら質問や報告にくることができるようになった。

○ 作業学習評価表を用いて客観的に評価したことで、生徒の課題を再確認することができ、報告などの意図的な場面設定や生徒への言葉掛けなど、きめ細かな指導につながった。

● Ａグループでは、作業効率の高い生徒に一つの作業が集中したため、幅広い作業内容に結びつかないことがあった。

● 作業班の一員としての意識を高めることが必要である。

④　窯業班

（ア）研究のねらい

中学部窯業班は、１年４名、２年１０名、３年２名、計１６名で構成され、そのうち６名が重複学級の生徒である。人数が多く、さらに実態差が大きいため、作業時間の確保や実態差への対応についての課題がでてきた。

そこで、これまでの授業を見直し、生徒の実態に応じて支援の手立てを工夫・改善することで、これらの課題が改善されるのではないかと考えた。

（イ）研究の内容

a　作業時間の確保のために

①　分かりやすい作業環境の設定

自ら道具の準備や片付けができるように、道具の置き場を決め、写真や文字で示すようにした。その結果、全体的に片付けが早くなった。職員の支援が少なくても、自分から準備や片付けをするようになりつつある。（写真１）

②　片付けの方法（個人→流れ作業）

１学期までは、自分が使った道具は全部自分で片付けるようにしていたが、一人ひとりで片付けるため、待ち時間が長かった。また、片付けの内容によっては、難しい生徒もいた。生徒に合った持ち場を前もって決め、流れ作業にすることで時間の短縮を目指した。（写真２－１～３）

③　休み時間の長さの変更

休み時間を１５分から１０分に変更した。１０分にすることで、トイレと水分補給を含め、窯業室付近で過ごすことが増え、後半の始まりがスムーズになった。

b　実態差への対応

①実態把握表　… 生徒の実態について、職員で検討し、共通理解を図った。

②個別の指導計画　… 目標と手立てについて、職員で検討し、共通理解を図った。

③作陶手順カードの活用　… 生徒が活動に見通しをもち、主体的に活動に取り組めるよう、必要に応じて手順カードを個別に作成している。（写真３）

④グループ別　… １６名同時に同じ工程をしようとすると、作陶スピードに差があり、全員がそろうまでに待ち時間ができ、時間をもてあまし、不安定になる生徒がいた。グループ別にすることで、自分のペースで進めることができ、集中して作るようになった。（写真４）

⑤　評価の工夫　… 評価は､従来から個別の作業ファイルに評価欄を設けて、自分の目標とあいさつの２項目を中心に、自己評価を行ってきたが、評価シールを色つきにすることで、評価のレベルが見やすくなった。（写真５）

（ウ）成果と課題

今回の研究を通して、生徒の実態を職員で共通理解し、実態に応じてどう支援を工夫すれば、さらに円滑に授業が進められるのかについて検討することができた。今後、毎年生徒の実態は変わっていくわけであるが、しっかりした実態把握と理解のための時間を確保し、実態把握表を検討・改善し、職員の共通理解を図っていくことが大切であろう。さらに、実態に応じて支援の方法を改善しながら、作業学習を展開していきたい。

写真１

写真２－１

写真２－２

写真２－３

写真３－１

写真３－２

写真４

写真５

ウ　成果と課題

今年度の作業学習の研究の一番大きな成果は、作業班ごとの話し合いの時間をもつことができたことであろう。それにより、個々の生徒の実態把握が十分にでき、生徒に対する支援について共通理解を図ることができた。また、どうしても作業担当主任一人の負担になってしまいがちであった教材の準備についても、伝達の機会があることで、分担したり、よりよい教材を開発したりすることができた。

今後の課題としては、この時間を来年度、どう確保していくかということがあげられる。生徒数増加による作業種目の新設や作業場所の確保、学級との連携の方法など、まだ検討が必要な課題も多く残っている。

（５）　年間指導計画の実践と検証

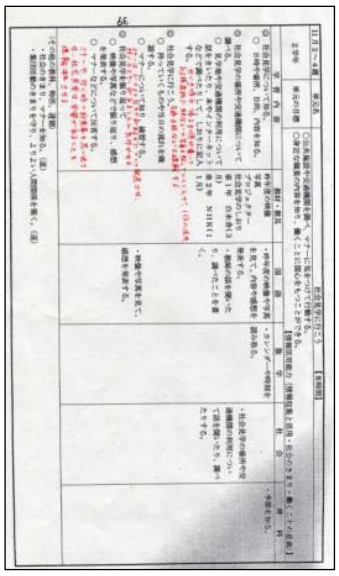
ア　研究のねらい

昨年度までに作成してきた年間指導計画（以下、年計）に基づいて授業実践を行い、年計の妥当性を検証していくことで、生徒一人ひとりが進んで取り組む授業づくりを目指すこととした。

イ　研究の内容

個人研究として年計の中から題材を選定し、指導計画に基づいて学部職員全員が一人一授業を行った。その際、「年計の加筆修正（資料１）」、「本人の授業反省（資料２）」、「Ｔ１以外の授業反省（資料３）」を行い、ストックしていくことで妥当性の検証とした。

資料１



資料２

資料３

ウ　成果と課題

学年ごとに「年間指導計画の実践と検証」における成果と課題について検討した。

○　題材集としては活用できた。
○　年計を参考に生徒や学習グループに合わせてアレンジすることができた。
○　初めての特別支援学校勤務であったが、授業の組立の参考になった。
○　授業の意見を書いてもらい、次の授業に生かせた。
○　研究授業ほど固苦しくなく実施できた。
○　年計をじっくり見る機会になって良かった。今後も見直していきたい。
●　教科の年計については、個人差があり年計通りには進めにくい。
●　美術の年計には行事に合わせた内容が多く、美術的要素の濃い内容がもっとあると良いと思った。
●　学年によっては同じ流れでは難しい。

上記の結果から、年計を題材集として多くの職員が活用することはできたが、生徒の実態に応じて内容や組立を修正していくことの必要性を見いだすことができた。また、授業に対しての意見交換をすることで生徒一人ひとりが進んで取り組む授業づくりが意識できたことは大変意義深い。教科や学年構成によっては活用しにくい部分が存在するので、さらに活用しやすい年計の修正が課題といえよう。

６　研究のまとめと今後の課題

（１）成果

○　各学年の課題が明確になった。

○　作業学習ごとの協議が深まった。

○　年間指導計画、指導形態について協議することができた。

○　協議する時間を設けたことで生徒一人ひとりの課題を確認でき、職員間の共通理解が図れた。

○　目標や指導内容が明確になり、指導方法や教材教具が工夫できた。

○　グループ別学習により教育的効果が得られた。

（２）課題

●　共通理解を行うための時間設定が難しい。

●　習熟度別学習では、学級が分散したことで学級担任が学習内容を充分把握することが難しいこともあった。

●　実態に応じた弾力的なグループ編制が求められる。

●　より個に応じた支援・指導をするための教材・教具の工夫が必要である。

●　生徒の実態は、さらに幅広く、個人差や複雑化が進んでいるため、それに対応していく必要がある。

平成２５年度　高等部研究班

１　高等部研究副題

『生徒の実態に合った効果的な課題別学習のあり方　～新教育課程の創設と移行を目指して～』

２　副題設定の理由

高等部では，主題に迫るために，生徒がよりよい自立と社会参加を目指すためには何が必要かについて考え，「実態に合った効果的な課題別学習のあり方」の探求に取り組むこととした。

高等部における「効果的な課題別学習」とは、生徒それぞれの実態や発達段階によりあった学習活動を計画・実践することであると考える。これを通して，本校で設定した「共に生きる力（①健康体力②身辺生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他」を育成することができると考えた。さらには，これら８つの力を総合的に身につけることで，集団生活の中で一人一人に合った形で社会に適応し、必要な支援を受けながら主体的に生活を営もうとする卒業後の姿を実現することができると考えた。

そして，これらの実践を通して，キャリア教育における「自主的主体的に活動する力」を，生徒１人１人の実態に即して育成していくことができると考え，本副題を設定した。

本校高等部の近年の入学者状況を考えた時，その実態が非常に多様化していることが大きな課題となっている。つまり，現在の通常課程・重複課程の２課程では生徒の実態に即した学習活動の展開が困難になってきている状況がある。

一昨年からの学部会・教育課程検討会で，新課程の創設が話題となり，それぞれの課程の目指す生徒像や授業づくりを議論してきた。昨年の研究で、全ての過程の目指す生徒像や目標を明確にし、時間割と年間指導計画の改善を図ることができた。これをふまえ，今年度は，

〇高等部３年生で取り組んだ、仮想Ⅲ課程クラスの検証。

〇作業学習の全体的な見直し。

〇　「みや央実態調査」の検証と、データの一つとなる国語と数学の問題作成と検証。

〇Ⅲ課程に新設する「職業」と「道徳」の検証授業の実施。

〇　年間指導計画に基づいた各教と教科･領域を合わせた指導の検証授業の実施､指導案･教材作成。

これらに取り組むことを目標とし，本副題を設定した。

３　研究の仮説

「共に生きる力」の構造をもとに，生徒１人１人の実態により合わせた新教育課程を創設し指導内容の工夫・改善を図れば，集団生活の中でそれぞれにあった形で社会に適応し必要な支援を受けながら主体的に生活を営もうとする自主的主体的な力の基礎につながるであろう。

4　研究の経過

学期	研究の内容
1 学期	○　本年度の研究全般について【研究推進委員会・全体研】 ○　高等部研究班における研究内容と班をメンバー構成の決定 ○　各班での研究
夏季休業	○　各班での研究
2 学期	○　中間報告会 ○　各班での研究
3 学期	○　学部内発表・協議 ○　全体研究（校内発表会） ○　研究のまとめ・次年度への引き継ぎ事項の整理

5　研究の内容

○　高等部 3 年生で取り組んだ、仮想Ⅲ課程クラスの検証。

○　作業学習の全体的な見直し。

○　「みや央実態調査」の検証と、データの一つとなる国語と数学の問題作成と検証。

○　Ⅲ課程に新設する「職業」と「道徳」の検証授業の実施。

○　年間指導計画に基づいた各教と教科・領域を合わせた指導の検証授業の実施、指導案・教材作成。

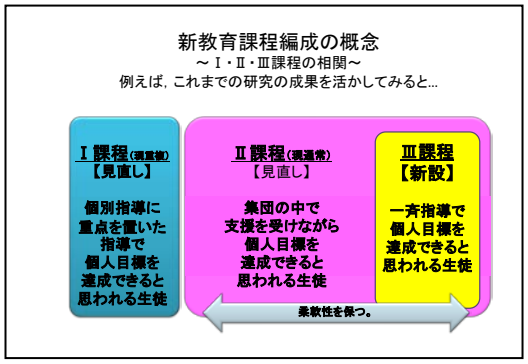


図１　ⅠⅡⅢ課程の相関（校内研資料より抜粋）

（１）「縫製班と手織り班～合同に向けて」班

本班では、作業学習の種目の編成についての検討がされる中、作業学習の内容の関連性が高い縫製班と手織り班を合併した作業学習を検討することになった。検討された内容としては、

・各作業学習の指導内容や指導形態の検証

・新しい作業学習班としての指導内容の考察、年間計画の作成、施設・設備の検討等である。

ア　研究のまとめ

①　指導内容の検討

現在の作業学習の内容を整理しながら、新たな指導内容について検討して年間計画としてまとめた。また、作業学習の１日の流れについても検討をしてまとめた。(「年間学習指導計画」「作業学習の１日の流れ」については別添資料として掲載する)

（ア）作業学習の内容について

a　基礎的なミシン操作の学習として食堂用台ふきの作成は実質的で効果的な作業学習内容である。また、作業学習のねらいが具体的で理解させやすく意欲も期待できるものである。縫製班で取り組まれている視覚的な支援の教材も理解を深めることができる工夫がされている。

b　手織り班では、経糸(たていと)の整経(せいけい)や織り、仕立てなど手織りを中心にして工夫された作業学習に取組んでいる。

c　縫製的な指導内容(基礎縫いやミシン縫い等)については共通しているが、家庭科での被服学習内容での指導や作業学習での指導を整理し、基本的な技能の指導に取り組む。

d　みや央祭にむけてバザー関連の製品作りや販売活動に向けての学習では、金銭の取り扱いや仕事への責任、コミュニケーション力などの学習課題に取り組まれている。

e　作業学習内容と関連させた個別作品製作などの取組は、手芸的な作品製作の取組としても共通しており、自発的な製作への意欲作りに効果的である。

f　作業内容の拡大の検討(ビーズ手芸、皮革手芸、受注製品　等)

（イ）作業学習の流れについて

a　縫製と手織りの作業内容によるグループ分けをして、作業学習の始まりと終わりは共通の流れにする。

b　清掃や休憩の取り方等についても検討し、新しい流れを計画する。

c　作業学習の場所(教室)の位置を検討する必要性がある。

（ウ）その他

a　名称についての検討が必要である。

（手芸班、手織り縫製班、手織り班、等）

b　作業学習の会計について

現在の会計を整理して、合わせた形で取り扱う。

②　授業参観（見学）計画及び実施

（ア）２学期に、縫製班と手織り班の作業参観、体験を実施した。

（イ）作業学習の流れや作業内容を体験することにより、より具体的なイメージをもつことができ、研究内容に活かすことができた。

（２）　「作業学習」班

ア　研究のねらい

高等部の作業学習は、これまでに職業教育の研究公開（平成２１、２２年度）の際に作業グループの類型化や作業グループごとのねらいの設定など、大きな変遷を経ている。それから３年目を迎え、目標、学習内容、評価さらに作業種目について再検討、整理することをねらいとしている。また、平成２６年度より新教育課程も開始され、Ａグループの再編、オープン作業班の基準等、明確化が必要な部分についての検証も本研究のねらいとしている。

イ　研究の内容

①　Ａグループ作業班の再編

②　Ｃグループオープン作業班の位置づけ、所属生徒の基準の明確化

③　高等部作業学習の全体目標の再検討並びに各作業グループの目標の設定

④　新しいキャリア発達の視点に基づく、各作業グループの、評価の視点の整理

①について、来年度より開始されるⅢ課程は、２、３年生のみで編成され、作業種目は全員Ａグループの所属となる。その場合、グループ編成として２つが望ましいと判断し、メンテナンス班とクリーニング班とで編成することとなった。

次に②であるが、これまでＣグループについては、１対１での指導が理想であったが、グループ編成の明確な基準がなかったため、人数が肥大化、職員数も１対１にはほど遠い形となっていた。さらに「出向」という形で、一部生徒についてはＢグループで学習するという変則的な指導も行われた。そこでＣグループ編成について、a)各種検査等の結果、基礎基本的な事項の学習や日常的な支援を常時必要とすると判断される生徒、b)日々の学習活動に、自立活動の指導内容（特に「２心理的な安定」）を必要とする生徒、と位置づけた。また来年度より、出向の形は廃止する。

③については、新教育課程の開始、種目の再編成等にあわせ、再度全体目標を見直した。また、これまで各作業班で設定していた目標を各グループでの設定とし、各作業班が同じ方向性で指導できるよう配慮した。

最後に④については、平成２１、２２年度の研究公開で作成された作業学習のねらいをもとにして、文部科学省より新たに提示された『キャリア発達に基づく視点』を活用し、並べ替えと補足を行い、試案としてまとめた。

以上の内容については、別途資料にて提示しているので参照していただきたい。

ウ　成果と課題

○　各作業グループの編成基準の明確化。

○　作業グループごとの目標を設定し、職員が共通理解を図りやすい形にした。

○　キャリア発達に基づく評価表を作り、評価基準の共有や成績処理の効率化を狙った。

△　新しい取り組みで実績がなく、今後のためにも様々な情報を収集する必要がある。

△　試案として提示した評価表は、来年度以降もさらに検討が必要である。

△　今後も種目の変更や導入にあわせて、目標や評価を見直す必要がある。

※　参考文献

・特別支援学校学習指導要領解説　総則等編（高等部）　文部科学省

・新しい教育課程と学習活動 Q&A　特別支援教育［知的障害教育］

全国特別支援学校知的障害教育校長会　編著

高等部作業学習説明会

高等部作業学習全体目標

勤労の経験を通して、将来の職業生活や社会自立に必要な基礎的知識や技能を養うとともに、自己肯定感・有用感を育み、将来生き生きと生活するために必要な意欲や態度を培う。

Aグループ

就労の意義を自ら理解し、職業生活や社会自立に必要な基礎的知識や技能を高め、実践的な態度を育てる。

Bグループ

自分の役割や作業内容を理解し、仲間と協力して作業に取り組もうとする姿勢を育てる。

働く意欲を高め、社会生活に必要な能力と態度を身につける。

Cグループ

教師の支援を受けながら、様々な作業を行うことを通して、心理的な安定を図るとともに、社会生活への適応力を身につける。

資料１：作業学習の目標

本校高等部作業学習の編成

Aグループ

メンテナンス班

クリーニング班

Bグループ

農　業　班
木　工　班
窯　業　班
手織り・縫製班
手 工 芸 班
受注班（新規）

Cグループ

オープン作業班

資料２：作業学習の編成

（３）　「仮想Ⅲ課程の検証」班

ア　研究のねらい

新教育課程を展開するに当たって考慮すべき事項を次の２点に絞って研究することにした。

・通常学級において進級時の教育課程選択、決定までの過程・手順を明確にする。

・次年度に予想される問題点を明確にし、解決するための方法を提案する。

イ　研究の内容

①みや央実態調査実施に関する計画・調整

・数学班、国語班との連携

・「教育課程選択と決定までの手順」作成

・みや央実態調査集約方法の検討

②新教育課程実施に向けたシミュレーション

・H26 年度時間割モデルの作成

・H26 年度の各教科実施について担当者協議会の実施

・H26 年度の美術・音楽・体育・家庭についての確認

ウ　成果と課題

内容①について

成果：　国語班・数学班の協力と高等部全職員の連携により、みや央実態調査を計画的に実施することができた。

課題：　調査結果を、通常学級生徒の教育課程選択に活用するだけでなく、指導内容や指導方法の評価・見直し、卒業後の生活を見通した保護者や家族への支援にも生かすためのシステムを構築すべきと考える。

内容②について

成果：　各教科の方針と担当者間の共通理解を図ることで、グループ編成の方針や、特別教室の利用について見通しを持つことができ、H26 年度時間割モデルを提案することができた。

課題：　次年度の教育課程については、現在の学級数を想定して特別教室の利用計画やグループ数をシミュレートすることができたが、次年度以降、生徒数が増加することも十分考えられ、通常学級が７クラス以上になる場合は教室の確保と合わせて教育課程そのものの検討が必要となる。

平成 25 年 4 月 25 日
高等部研究にて　教務部より

高等部　新教育課程検討　2012 年 9 月 19 日

課程別教科・時数一覧表〈決定〉

課程	教科	自立活動	道徳	日生	生単	総合	作業	国語	数学	音楽	美術	保体	家庭	特活	職業	合計
重複学級	Ⅰ-ⅰ	3	-	6	6	-	9	-	-	2	-	3	-	1	-	30
	Ⅰ-ⅱ	4	-	6	5	-	9	-	-	2	-	3	-	1	-	30
	Ⅰ-ⅲ	6	-	6	3	-	9	-	-	2	-	3	-	1	-	30
通常学級	Ⅱ〈1 年〉	1	-	3	2.5	-	9.5	2	2	2	2	3	2	1	-	30
	Ⅱ〈2・3 年〉	1	-	3	4.5	-	9.5	1	1	2	2	3	2	1	-	30
	Ⅲ〈2・3 年〉	-	1	1	-	1	11.5	2	2	2	2	3	2	1	1.5	30

＊平成 24 年 5 月 18 日提案の時間割モデルをもとに、7 月 6 日グループごとに協議→決定したもの。

＊週あたりの時間数。

＊総合的な学習の時間については年間 20～35 時間程度のまとめ取り。

資料１：課程別教科・時数一覧表

高等部　各教育課程で大切にしたいこと・身につけさせたい力<確認>

平成 26 年 1 月 7 日
みやざき中央支援学校　高等部

教育課程	大切にしたいこと	身につけさせたい力
Ⅰ （重複学級）	・本人や家族のおもい ・楽しい雰囲気 ・様々な人との関わり	・意志や感情をいろいろな形で表現する力 ・皆と一緒に過ごせる力 ・身辺処理などの支援に応じる力
Ⅱ （通常学級）	・安心してのびのびできる環境 ・保護者・施設・寄宿舎との連携 ・本人が活躍できる場	・気持ちを伝える力 ・基本的な生活行動を自ら行う力 ・皆と一緒に活動できる力
Ⅲ （通常学級）	・本音を出せるような関係づくり ・社会生活や就労を見越した支援 ・将来への夢	・人と関わる力 ・自立して生活する力 ・余暇の過ごし方

話し合いを進めていく上での共通理解

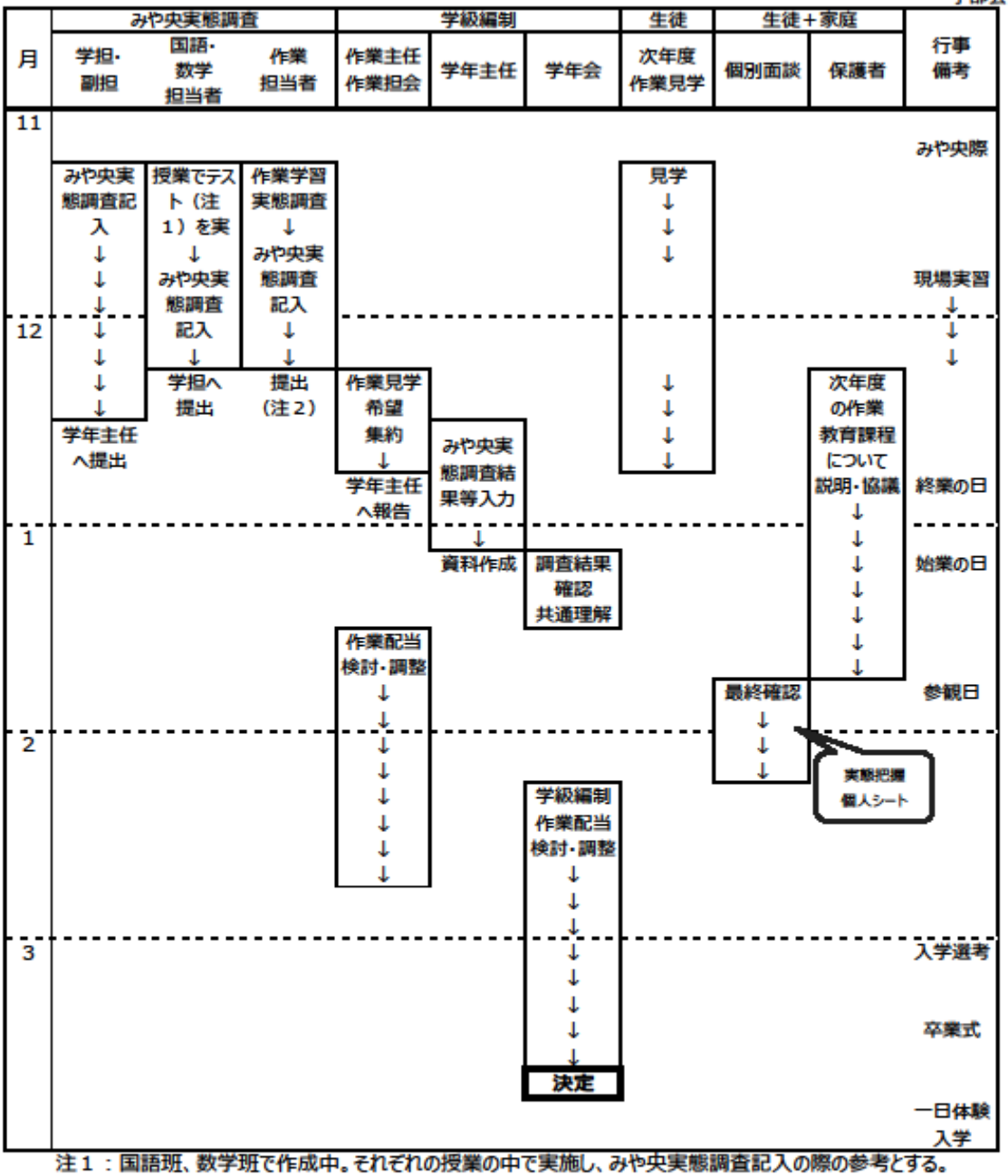
・会議の中で発言する（終わってからではなく）　・会議の内容を覆さない　・発言は短く、結論を先に。　・前向きな姿勢で！（過ぎたことより、これからを考えましょう。）

資料２：高等部各教育課程で大切にしたいこと・身につけさせたい力

H25年度高等部研究③班

高等部　新２・３年生　通常学級
教育課程選択と決定までの手順

20130910
学部会



注１：国語班、数学班で作成中。それぞれの授業の中で実施し、みや央実態調査記入の際の参考とする。
注２：「作業学習実態調査」は作業主任へ、「みや央実態調査」は学担へ提出。

資料３：教育課程選択と決定までの手順

（４）　「Ｉ課程の検証」班

ア　研究のねらい

Ｉ課程の検証班には、各学年の重複学級の担当職員が所属している。Ｉ課程では、学年ごと、あるいは学年内においても、生徒の発達や特性、運動機能の面など実態は多様である。学年全体で行う学習では、目標の達成を目指しつつ、生徒一人一人が生き生きと活動に取り組めるよう指導・支援する難しさを、ほとんどの職員が実感としてもっている。そこで、特に多くの意見が出された、保健体育と学年のＩ課程全体で取り組む生活単元学習に絞って研究を進めることとした。

イ　研究の内容

（ア）　生活単元学習の指導事例を作成する。

学年の重複学級全体で取り組むものについて、昨年度作成した年間指導計画を元に、各学年いくつかの単元について、学習内容をより具体的にした指導事例を作成した。作成においては、行事や季節など、作成する単元に偏りがないようにし、また、それぞれの学年の多様な実態をふまえたものとした。こうすることで、今後、生徒の多様な実態に応じた学習内容の計画と、実際の指導や支援に活かせるものになったと考える。（資料　指導事例の作成例）

（イ）　保健体育におけるＩ課程の生徒への支援の方法について提案する。

生徒の学習内容については、個別の指導計画を考慮した上で教科担から提示される。今研究では、Ｉ課程以外の職員が指導支援することも多いことから、Ｉ課程の生徒の目標を、保健体育の目標を踏まえつつも柔軟にとらえ、以下のように共通理解を図った。

○　運動量の確保
○　集団への参加
○　運動を楽しむ。

また、全学年が参加する球技大会に向けた単元について、指導・支援の在り方について上記の３つの観点から意見交換を行い、再確認した。

ウ　成果と課題

（ア）成果

○　各学年が全体で取り組む生活単元学習の指導事例ができた。これにより、次年度以降、より生徒の実態に応じた学習計画をたてることができ、生徒一人一人が生き生きと学習に取り組むようになると期待できる。

また、授業を担当する職員の負担が軽減され、支援にあたる職員は支援のイメージをもちやすくなる。

○　保健体育において、重複学級の生徒の指導で各学年共通した目標を確認することができた。また、球技大会という１つの単元であったが、支援の方法について提案でき、実際の授業で活かすことができた。

（イ）課題

○　各学年が全体で取り組む生活単元学習のすべての単元で指導事例を作成することができなかった。

○　保健体育では、より多くの単元で、支援の方法を提案できるとよかった。また、単元によっては、学習内容そのものの研究を進めることができるとよかった。

（資料　指導事例の作成例）

１年 １１月	単元名	校外学習に行こう（１２時間）

単元の目標	○　公共の交通機関について、知識を広げ利用の仕方を学ぶ。 ○　公共の場でのマナーについて学ぶ。

学　習　内　容	関連する教科
○　校外学習の日程を知る。 ・いつ、何を利用して、どこへ、何をするのか等の説明を聞く。 ・説明を聞きながら、学習プリントを記入したり写真をはったりする。	国語・数学
○　公共の交通機関の利用の仕方を学ぶ。 ・公共の交通機関（バス、電車、タクシー、飛行機）について映像を見たり、説明を聞いたりする。 ・説明を聞きながら、学習プリントを記入したり写真をはったりする。 ・公共の交通機関（電車またはバス）を利用する練習をする。	社会・国語・数学
○　公共の場での、マナーについて学ぶ。 ・公共の場はどんな所か、家の中との違いについて説明を聞いたり考えたりする。 ・ロールプレイを見たり、参加したりしてマナーについて理解を深める。（身だしなみ、言葉つかい、態度等）	社会・数学
○　校外学習に出かける。	
○　校外学習を振り返る。 ・いつ、何を利用して、どこへ、何をしたのか思い出す。	国語・数学・社会
・自分のマナーについて、振り返り、自己評価する。	国語・社会

（５）　「国語」班

１　研究のねらい

通常学級に在籍する生徒を対象としたみや央実態調査の「読む」と「書く」の基準を、客観的に評価する際の指標となるテスト問題を作成・実施・検証する。

２　研究の方法

みや央実態調査の「読む」の４項目と「書く」の７項目に関するテスト問題作成と実施

① 「仮想Ⅲ課程の検討」研究班と数学班との研究内容の協議
② テスト問題の内容や問題数、文字サイズ・フォント、問題用紙の枚数などの協議
③ テスト問題と模範解答の作成、誤植などの点検
④ テストの実施と採点、採点結果の集計
⑤ 国語担当の職員へのアンケート実施と結果の検証、テスト問題の修正など

３　研究の内容

（１）「読む」

① 漢字、ひらがなまじりの文章を読み、意味がわかる。
② 促音、長音、濁音、班濁音の入った言葉や文書を読み、意味がわかる。
③ 小学校中学年以上の漢字を読む。
④ 身近な説明書（電気機器、薬の用法など）を読んで理解する。

（２）「書く」

① 小学校中学年以上の漢字を書く。
② 促音、長音、濁音、班濁音の入った言葉や文書を正しく書く。
③ 見たことや経験したことについて、順序を考えて文書を書く。
④ 自分にとって必要な情報や要件をメモをとるなど自分で工夫して記録する。
⑤ 体験や事実、感想をまぜながら文章を書く。
⑥ 句読点や「 」を正しく使い、文書を書く。
⑦ 自分の書いた文章の誤字、脱字に気づき訂正する。

４　研究のまとめと今後の課題

○ 「仮想Ⅲ課程の検討」研究班と数学班と話し合いを行なったことで、数学班と連携しながら、テスト問題の作成から実施まで計画的に進められた。
○ 問題作成の作業量や検討事項が多く、テスト問題が完成するまでに多くの時間を要した。
○ 記述式問題は、採点結果の数値化が難しかった。模範解答に加え、解答例や注釈などのポイントをまとめた資料を作成し、客観的に採点できる資料を作成する必要があった。
○ テスト終了後は、テスト問題の修正や採点時の参考資料の作成などに時間を要し、結果を今後の指導内容や指導計画に生かすための検証ができなかった。
○ テスト問題は定期的に見直し、内容の修正などを検討する必要がある。

※　参考文献

特別支援学校高等部学習指導要領・解説、文部科学省著作教科書解説　など

（６）　「数学」班

１　研究のねらい

生活に必要な数量や図形など、実生活に則した数学的思考や知識の定着を目指し、理解が深まる授業を推進するため、本校生徒の実態を把握することのできる問題を作成し、数学を活用する能力と態度を育てる。

２　研究の方法

特別支援学校学習指導要領数学の目標と内容および文部科学省著作教科書を参考に、みや央実態調査の分類に基づき、「数量と基礎・数と計算」、「量と測定」「図形数量関係」「実務」の各問題を作成し、テスト形式で数学の研究を実施した。

３　研究の内容（みや央実態調査の分類より）

（１）　「数量と基礎・数と計算」

①３位数、４位数を数える。　②３位数、４位数を書く。
③２位数、３位数、４位数の大小がわかる。　④３位数で繰り上がりのある足し算をする。
⑤３位数で繰り下がりのある引き算をする。　⑥かけ算の意味を知っている。
⑦　割り算の意味を知っている。

（２）　「量と測定」

①定規を使い、ｃｍ、ｍ　を読む。　②はかりを使って、ｇ、ｋｇ　を読む。
③体温計を使って、自分の体温を正確に読む。　④１分単位の時刻の読み方をする。
⑤時間の計算をする。　⑥あと何分、あと何時間で何時何分かわかる。
⑦交通機関の時刻表の読み方がわかる。　⑧カレンダーを使って見通しをもつ。
⑨ペットボトルや缶ジュースなどの大きさとよく使われる容積がマッチングできる。

（３）　「図形数量関係」

①直角、三角形、四角形、円を理解する。　②位置関係を理解する。（上下、前後、左右）
③前から（後ろから、右から、左から、上から、下から）何番目を理解する。
④いろいろなグラフの見方がわかる。（棒・円）　⑤生活の中でグラフを書き、活用する。

（４）　「実務」

①いろいろな種類のお金を使って､予算の範囲内で買い物をする。 ②計算機を活用する。
③所要時間を考えて出発時刻を見通す等、予定をたてる。　④おこづかい帳をつける。

４　研究のまとめと今後の課題

生徒の得意分野、苦手分野の傾向がはっきり結果に現れた。２年生は、修学旅行や校外学習に向けた「時刻表の見方」や「お金の計算」など、授業で重点的に学習した内容の正解率が高く、反対に、１年生では正解率が低かった。文章問題での問い方、図の表し方が変わると正解率が下がった。テスト時間２５分間で７回調査を実施したが、もう少し項目をまとめて、実施回数を少なくすることも可能だと思われる。

（７）　「道徳」班

ア　研究のねらい

○　高等部Ⅲ課程実施に向けた道徳授業の準備。

○　模擬授業や授業研究をとおして、実際の道徳授業のイメージをもつ。

イ　研究の内容

①　昨年度作成した年間指導計画の確認・見直し

②　本時の展開例の作成

③　模擬授業

④　授業研究

高等部３年生の学級で、実際に授業を２回実施。

１回目：「いろいろな自分をつたえあう」という主題で、カードに書かれていること（例えば『最近うれしかったこと』など）について話し、友だちに聴いてもらう、という内容。

２回目：「正直に生きるってなんだろう」という主題（模擬授業と同じ内容）で現場実習直前に実施。ある生徒が現場実習中に商品を落としてしまい、悩んだ末担当の方に謝った、という内容。

ウ　成果と課題

〈成果〉

○　発問の仕方や、その発問に対する生徒の生の反応など、実際に授業をすることで得られたことが多く、来年度へ向けての準備につながった。

○　生徒主導、教師主導の２つのパターンでの授業を試みることができた。

○　授業の中で、生徒間の活発な意見発表が見られ、友だちとの交流もよくできていた。

〈課題〉

○　今年度は２学年の展開例のみ作成したので、来年度以降に３年生のものについても検討していく必要がある。

○　授業で活用できる資料（心のノートや読み物資料など）がまだまだ少ないので、今後さらに増やしていく。可能であれば、副読本の選定・購入も検討したい。

○　「家族愛」についての内容では、生徒の様々な家庭環境を考慮し、授業内容に配慮する。

（８）　「職業」班

ア　研究のねらい

来年施行する「職業」について検証授業を行うことで、０．５と１単位時間に分けた授業形態と効率的な運用について見通しを高める。

各学年で指導したい内容や卒業生の課題例をもとに「つけたい力」焦点化し、精選を図った題材設定を年間指導計画に位置づけていく。

イ　研究の内容

仮想Ⅲ課程クラスでの「職業」の検証授業を３回行う。授業の内容設定（追加項目の検討や精選）について協議し、教科書的に活用できる指導教材の収集と検討を行う。

昨年試作した「職業」の年間指導計画（２年生・３年生）の修正、改良を図る。

ウ　成果と課題

検証授業は題材と時間が限られていたため、「就職面接会」への対策的な取り組みの検証となってしまった。１クラスだけでなく、３クラスからの合流で授業を組み、焦点化した面接演習・振り返り・自己修正等ができたことで、面接当日の生徒たちは落ち着いて実力を発揮できた。一方、研究中期に１～２年生から挙げられた「注意されたときの対応」「言い寄られた時の断り方」といった、スキルトレーニング的な内容について検証できなかった。来年度は、演習を含めた１～２年生向けの検証授業を行って、指導内容を充実させていきたい。

教材については、検証授業以降に収集したものが多かったため、紹介が中心となった。しかし、県教委より参考文献に挙げたもの３種類を６冊ずつ購入してもらえたので、各学年や学級における進路学習・自立活動の教材づくりで活用が、今後大いに期待される。

年間指導計画については、月単位から週単位へ細分化したものに改良し、１サイクルの流れを整理した。０．５時間枠を座学（ケース学習やワークシートでのスキルトレーニング）や導入、まとめ学習に充て、１時間枠を演習として時間を確保する位置づけを図ったことで、運用の見通しが立てやすくなった。また、改良点として、キャリア教育の４領域の視点を明確にした指導が行えるよう、指導内容の横にその項目を表記する欄を設けた。

大きな課題として、「午後の作業」の時間等に２～３年生が合同学習して効果を高める単元の設定について、十分な検討までにたどり着かなかったことである。次年度は、試行的に提案と検証を行い、年間指導計画に定着させられるようにしていきたい。

※　参考文献

○　『知的障害・発達障害の人たちのための見てわかる社会生活ガイド集』
「見てわかる社会生活ガイド集」編集企画プロジェクト編著　　ジアース教育新社

○　『あたまと心で考えよう　ＳＳＴワークシート思春期　編』
『あたまと心で考えよう　ＳＳＴワークシート自己認知･コミュニケーションスキル　編』
『あたまと心で考えよう　ＳＳＴワークシート社会的行動　編』
３冊ともに　ＬＤ発達相談センターかながわ　編著

○　『知的障害・発達障害の人たちのための見てわかるビジネスマナー集』
「見てわかるビジネスマナー集」編集企画プロジェクト編著　　ジアース教育新社

（９）　「性教育」班

ア　研究のねらい

障がい児教育、特に知的障がい児に対する性教育は、多くの人々に必要性が認識されており、本校でもいち早く性教育推進委員会を中心に取り組んできた。各学部で指導事例集を作成し、毎年見直しを行い、年間指導計画に沿って、保健体育や学級活動など様々な場面で指導している。しかし、入学してくる児童生徒の実態差の拡大により、さらなる指導内容の見直しも求められるようになってきた。さらに、メディアによる性情報の氾濫や情報機器の急速な発達により、それらへ対応する新しい指導内容の精選の必要性も強く求められている。そこで、本研究班では、高等部の新教育課程への導入に合わせこれまでの指導内容を見直し、新教育課程ごとの指導内容を提案することにした。なお、研究に当たっては、研究する時間も限られていることから、これまでの各都道府県で検討された手引き等を多く参考にさせてもらい、本校の実態に即したものを作成することにした。

イ　研究の内容

①　性教育の指導内容の分類（分野・項目）

（ア）　自己の性自認（自己の性を確かにするために必要な内容）

○　生命に関する側面

○　身体的側面

○　精神的側面

（イ）　男女の人間関係（男女の人間関係の育成に必要な内容）

（ウ）　家庭や社会の一員として（家庭や社会の一員として必要な性に関する内容）

②　高等部各課程別の指導内容の例（題材の一覧表）

③　項目別各課程のねらいと指導内容（１１項目）

ウ　成果と課題

①　研究の成果

（ア）今まで整理されていなかった性教育の指導内容の分類を「自己の性自認」「男女の人間関係」「家庭や社会の一員として」の３分野に分類し、さらに細分化したことで、これまで取り組んでいなかった指導内容が明確になった。

（イ）新教育課程への導入に合わせ、各課程・学年の指導内容を例示したことで、各学級の生徒の実態に合った内容が選択しやすくなった。特に、重複学級では指導内容が固定していたので、細分化することで異なる内容を選択・指導することが可能になった。

（ウ）各課程の基本的な考え方（ねらい）を明示することにより、指導のねらいを焦点化することができた。

②　研究の課題

（ア）分類して例示した各項目によっては、各課程・学年ごとの指導内容を具体的に示すには難しいことや時間的制約があり、表記の仕方が統一できず、ばらばらになった。

（イ）Ｉ課程については生徒の実態差が大きく、項目が増えたことで生徒に指導内容が合っているのか、また細分化すること自体がよかったのか、検証する必要がある。

（ウ）性教育の中に人権学習をどう扱うか、検討する必要がある。

（エ）各項目の指導内容については、ある程度系統性はとれているが、項目同士の関連性については整理しておらず不十分であり、ダブっている内容もあった。

（１０）　「自立活動」班

ア　研究のねらい

本校高等部では、自閉症などの発達障がいのある生徒の在籍が増加し、情緒面や行動面で様々な困難を抱える生徒が多くなってきたため、平成２２年度から通常学級にも自立活動の時間を１時間特設し、自立活動の指導の充実に取り組んできた。その結果、生徒の情緒面での安定や対人関係の改善など一定の成果が上がりつつあるが、担当教員が一人一人の実態や課題に応じた指導内容を選定するのが大変で、参考となるような実践事例も少なく、指導を進めるのに苦慮している、といった実情も明らかになった。このような中、自立活動研究班では、一昨年度から「自立活動実践事例集」の作成に取り組み、昨年度は事例を増やし、関連する資料も掲載して、高等部全職員に配付した。今年度は、この事例集の活用や自立活動の指導に関するアンケート調査を実施し、その結果を踏まえて、今年度も継続して「自立活動実践事例集」を作成することにした。

イ　研究の内容

（ア）　「平成２４年度高等部自立活動実践事例集」の活用状況等に関するアンケート調査

提出数が１５名と少なかったが、よく活用・時々活用（５）、あまり活用しない・全く活用しない（１０）であった。活用しない理由としては、事例がクラスの生徒に合わない、事例を参考に指導を組み立てることが難しい、が多かった。自立活動の指導については、基礎的なことを分かりやすく整理した資料がほしい、校内で基礎的な研修会を開いてほしい、といった意見が目立った。また、本校教育支援部が平成２２年度に作成した資料「自立活動の項目と知的障がい特別支援学校における具体的な内容（試案）」についても尋ねると、存在が薄れ、活用されていないことが分かった。

（イ）　「平成２５年度 高等部自立活動実践事例集」の作成　＜今年度版のおもな特徴＞

○　平成２４年度の事例はそのまま残し、２５年度作成事例を追加した。

○　まえがきを兼ねた「自立活動の基礎的事項と本校高等部における取組の現状」のページに、卒業生のイラストを掲載して、親しみやすいものになるよう工夫した。

○　「お薦めしたい書籍案内」を設け、新規購入した関連の書籍等を紹介した。

○　「自立活動の項目と知的障がい特別支援学校における具体的な内容（試案）」を一部改訂し、資料としてこの中に組み入れ、新鮮なイメージで活用の便を図った。

（ウ）　自立活動の授業実践

高等部３年重複障がい学級の生徒２名を対象にして、「身近なものを使って作ろう～パン磁石～」という題材で、内容「2(1)情緒の安定に関すること」「3(2)他者の意図や感情の理解に関すること」を中心に指導を行った。その結果、様々な感触の物や道具に触れることで、感覚の変化を楽しみながら、落ち着いて取り組むことができた。

（エ）　自立活動関連の書籍コーナーの新設

国からの委嘱研究予算で購入した、上記の自立活動関連書籍等を、職員室の活用しやすい場所に配置し、貸し出せるように準備を進めている。

ウ　成果と課題

○　昨年度の事例集の活用等に関するアンケート調査を実施し、指導者のニーズを把握し、その結果を踏まえて、事例集の改訂に取り組むことができたのは良かった。

○　追加できた事例は少なかったが、新規書籍の購入や紹介、イラスト等を活用した読みやすさの改善、関連資料との組合せなど、新たな工夫を行うことができた。

○　発達障がいの生徒や二次的な障がいを抱える生徒の増加、複雑な環境要因などとの関連など、ますます自立活動の指導の充実が求められている。指導経験の浅い職員でも安心して支援に取り組めるような、校内の研修・サポート体制づくりが大切である。

６　研究のまとめと今後の課題

今年度の研究を通して、新教育課程の理念の共通理解を図り、授業づくりをゴールとした研究を推進することができた。仮想Ⅲ課程クラスの検証、作業学習の再編成、目標等の見直し、「みや央実態調査」の検証と、データの一つとなる国語と数学の問題作成と検証、Ⅲ課程に新設する「職業」と「道徳」の検証授業の実施、年間指導計画に基づいた各教と教科・領域を合わせた指導の検証授業の実施、次年度にすぐ使えるような指導案や教材等を作成することができた。自立活動については、高等部の実践をもとに、昨年のものに改良を加えた「実践事例集」を作成することができた。また、9 月に中間報告会を設定したことで、小グループ間での共通理解を図ることができ、研究に対しての職員全体の意識が高まった。

１年間の研究によって、これらの成果が生まれたことは大きな前進であると考える。生徒１人１人に合わせた効果的な課題別学習の実践につながる指針となっていくと思われる。

本校高等部では、平成２６年度より、新教育課程の全面実施を目指している。これを踏まえ、

○　平成２４・２５年度に作成した年間指導計画や指導内容表や教材等の検証・改善を進める。

○　これらをもとに授業実践を実施し、チェックを行い、改善を積み重ねる。

等が今後の課題としてあげられる。

これらの課題を次年度の研究内容として取り上げ、新課程へのスムーズな移行につなげていきたい。

平成２５年度　寄宿舎研究班

１　研究副題

生活能力を高める支援の在り方はどうあればよいか　～自立に向けての指導～

２　副題設定の理由

寄宿舎は昭和４６年の開校当初より「日常生活に必要な基本的生活習慣の確立を図り、社会に適応する態度や能力を高める」ことを目標に掲げ、様々な角度から工夫や支援を試みてきた。

現在５７名の生徒が在籍しており、生徒の障がい種別や程度が多様化している。そのため、個々の実態や問題点を的確に捉え、学校や保護者との連携や関係機関（医療・福祉）等の協力体制も必要になっている。また、入舎生の約９割が高等部生ということもあり、卒業後の社会参加を目指した支援も重要となってきた。

そこで、基本的生活習慣についての実態を調査し、集団生活を通して共に生きる力を育む生徒の育成のため、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援の在り方について研究を深めていきたいと考え、この副題を設定することにした。

３　研究の仮説

一人一人に応じた具体的で継続的な支援の在り方を工夫すれば、自立に向けての基本的な生活習慣の定着とあらゆる生活の場で適応できる力が身につくであろう。

４　研究の経過

	月	研究内容	
平成24年度	４　月～　７月	全体研	次年度の研究の進め方について（副題の決定、内容方法の確認）
	８　月	全体研	具体的な取組内容の決定
	９　月	全体研	チェックシート作成
	１０月～１１月	全体研	実態調査
	１２月	全体研	チェックシート集計
	１月～　３月	全体研	課題の把握及び次年度の取組検討

	月	研究内容	
平成25年度	４月	全体研	今後の研究の進め方について（確認）
	５月～６月	研究委員会、棟研究、全体研	・チェックシートを用いて、新入生の実態観察の実施 ・昨年度終了している生徒についてはグラフを元に目標を作成する ・観察後、集計し、グラフ化する
	７月～８月	研究委員会、棟研究、全体研	・自立を目指した環境つくりのための話し合いをする
	９月～１２月	研究委員会、棟研究、全体研	・各棟で実践　　※進行状態を報告
	１月～２月	研究委員会、棟研究、全体研	・まとめ　　・全体報告会

５　研究の内容

平成２４年度はチェックシートの結果をグラフ化し生徒一人一人の課題を明確にした。その結果を基に、今年度は社会に適応する態度や能力の向上を目指し、生活体験ができる場所の設置や、生徒が高い意識をもって生活できる環境作りの取組を行った。

支援方法は「実践１」「実践２」「実践３」のとおりである。

実践１　男子棟

対象舎生	高等部男子
実態	・ほぼ身辺自立ができているがさらにステップアップの必要な生徒がいる。 ・日課に沿って行動できるが声かけ等の支援が必要な生徒が多い。 ・言葉づかい、あいさつ、身だしなみ等課題をかかえている生徒が多い。
目標	・社会自立にむけ生活能力を高める。
棟での取組	・実態調査 ・チェックシートによる自己評価 ・自立生活体験 ・卒業前の話５項目 ・生活指導（洗濯）

経過

１　「自立生活体験」の取り組み

高等部３年生から一般就労を希望しているＡさんを抽出し、自立生活体験の取組を行った。

（１）実態把握と課題

２４年度に作成したチェックシートを用いて実態調査を行った。（資料１参照。）

①　実態

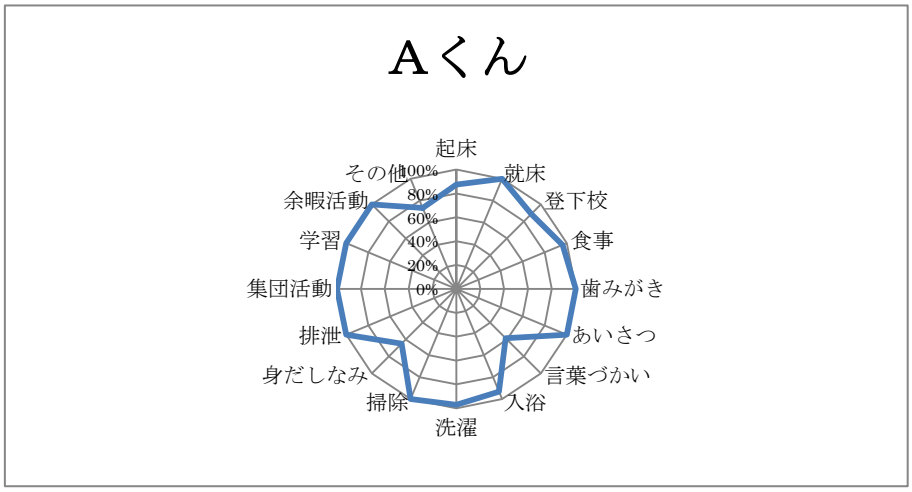
日課に沿った生活は送ることができているが、整理整頓は声かけが必要だった。職員に対して友達口調になることもあり、同級生や下級生に対しては乱暴な言葉をつかうことがあった。自分の洗濯当番の時、なかなかとりかかろうとせずサボろうとした。汚れた衣類を平気で着用し、シャツを出すなどだらしない格好をしていた。

②　課題

・整理整頓ができない。

・場に応じた言葉づかいができない。

(資料 1)



（２）目標

・整理整頓ができるようになる。

・卒業後を見据えて自立した生活をおくれるようになる。

（３）実践の内容

9 月に 1 週間、11 月に 1 週間自立部屋という個人用の部屋を用意し、自分で何をするか等、考えさせながらの生活をさせた。独自のチェックシートを作成し、意識の向上のため、毎日本人に記入をさせた。また、職員も様子観察をし、チェックシートを記入し、項目としては「あいさつ」「言葉づかい」「うがい手洗い」「洗濯」「お風呂」「掃除」「食事中のマナー」「学習時間」「就床」「起床」「着替え」「登校準備」「整理整頓」とし、３段階で評価した。（資料２参照。）また自立にあたってどういうことに気をつけるか等話をした。本人のチェックシートと職員によるチェックシートを照らし合わせた結果、整理整頓と身だしなみについて重点的に指導していった。

整理整頓については、別にチェックシートを作成し、（資料３参照。）本人と職員で記入した。意識向上を図るため、ロッカーの中が綺麗な状態の写真を貼り、毎日職員でロッカー点検をした。

（資料２）

チェックシート

	11/17	11/18	11/19	11/20	11/21
あいさつ					
言葉つかい					
うがい手洗い					
洗濯					
お風呂					
掃除					
食事中のマナー					
学習時間					
就床					
起床					
着替え					
登校準備					
整理整頓					

○・・・・できた
△・・・・まあまあできた
×・・・・できなかった

＜備考欄＞

（資料３）

チェックシート

	11/17	11/18	11/19	11/20	11/21
ロッカーの整理					

○・・・・できた
△・・・・まあまあできた
×・・・・できなかった

＜備考欄＞

２　「卒業前の話　５項目」の取り組み

高等部３年生を中心に抽出し、項目ごとに担当を決めて、それぞれの経験談や資料などを用いながらわかりやすく指導を行った。

①　経済（お金の使い方）

卒業後の希望を聞き、なぜ仕事をするのか？なぜお金が必要か？とういう話から具体的な話しへと進めていった。二人ともお小遣いをもらい自分で計画的に使ったという経験がなく、実社会の中では不安がある。舎生活では経験させる場もなく、保護者へ早い時期から経験させる必要性を話していくことが大切ではないかと思った。

②　携帯電話での使用方法

携帯電話の使用方法はわかっているが、基本料金や使用での発生料金のことはわかっておらず、資料などを用いて本来の携帯電話での使用目的や発生料金を説明しながら指導を行った。その中で、携帯電話を使うメリットは理解できるが、デメリットは理解しようとしないため注意しながら指導をした。

③　マナー・エチケット

あいさつ・礼儀作法を中心に行った。あいさつと礼儀作法の意義はわかっていたが、時と場合によっての使い分けが出来ていない様子がみられたため、ロールプレイを通しての指導を行った。その結果、練習では出来るが、日常生活では出来る場面と出来ない場面もあったため継続した指導が今後も必要と感じた。

④　男女交際

本生は異性に関する興味、関心はそれほどない。しかし、実際に交際の経験がないことから、知識や性に関することなどは理解できていない。しかしながら、将来的に家庭を築き子どもを育てたいという思いがあり、今後の望ましい男女交際や接し方について話しをした。

⑤　問題解決の方法

就労を希望している生徒であったが今回、上記の内容を話しする中で社会に出て困難に直面した際に、自ら問題解決する力がないことが分かった。しかし、社会人として働きたいという意欲や、素直に他人の話を聞こうとする姿勢が見られるため、最終的にさまざまな問題に直面した際、自分一人で解決せず周りの人たちに相談するなどの問題解決の方法が適切な対処法であることを伝えた。

３　「洗濯指導」の取り組み

前年度まで下校後校内着や作業着はまとめて職員で洗い、個人の洗濯は２～３人の小グループを作り当番制で洗濯させていた。

しかし今年度は、卒業後の自立を見据え、自分のことは自分でするという基本に戻り個別に洗濯させることとした。４月に洗濯機使用可能な生徒の把握と一連の洗濯の流れを理解しているかを知るために、チェックシート（全棟共通）を使い調査した。（資料４参照。）その後は９月～１２月の４ヶ月で棟独自の細部に渡るチェックシートを作り職員で評価し、課題がでてきたらその都度指導してきた。

また、棟会や行事（洗濯指導日）を利用した全体指導個別指導を行った。洗濯指導要領に沿った洗濯の仕方を棟会で行い個別の指導と行事（洗濯日）を利用しての指導とも平行して行った。

（資料４）

洗濯チェックシート

	項　目	自立	声かけ	介助	できない	特記事項
1	洗濯の準備をする事が出来る。					
2	洗濯物の仕分けが出来る。					
3	洗濯物の汚れを確認することが出来る。					
4	洗剤を適量入れることが出来る。					
5	二槽式洗濯機を使うことが出来る。					
6	全自動洗濯機を使うことが出来る。					
7	全自動でお急ぎと普通を使い分けることが出来る。					
8	使った洗剤を片付けることが出来る。					
9	しわにならない様ひろげて干すことが出来る。					
10	干し物をピンチで止めることが出来る。					
11	天気のいい日は外に干す。					
12	洗濯物を取り入れることが出来る。					
13	乾いているか湿っているかを判断できる。					
14	洗濯物をたたむことが出来る。					
15	洗濯物をタンスにしまうことが出来る。					
16	衣類ごとに仕分けして入れることが出来る。					
	＜靴下手洗い＞					
17	汚れている箇所がわかる。					
18	石鹸をつけることが出来る。					
19	洗濯板を使うことが出来る。					
20	落ちない汚れを職員に伝える事が出来る。					
21	すすぐことが出来る。					
22	しぼることが出来る。					
23	最後は道具を片付けることが出来る。					
備考						

４　成果

自立部屋に関しては、意欲的に取組む姿もみられ、また周りに頼らず自分で生活するという意識付けになった。卒業前の話５項目を行ったことで生徒の考えている事や不安に感じていることを把握できたことで、個に応じた指導をすることができた。

今後の課題	自立部屋に関しては、現在の施設設備では実践することが限られているので、思うような結果がでなかったが、卒業前の話５項目や洗濯指導をすることによって色々な課題が見えてきた。今後、施設設備の改善は難しいことから、限られた環境でできることを創意工夫し、実社会での生活に結びつくように支援していきたい。

実践２　Ｂ２棟

対象舎生	高３生全員
実態	・あいさつ、返事、自分の役割等を自主的にする生徒がいない。 ・社会に出てのマナーの認識の不足。 ・敬語を使えない。 ・何事にも積極的に取り組む姿がみられない。
目標	・社会に出て必要なマナーの知識を学ぶ。 ・気持ちの良いあいさつ、返事をする。 ・高３生の自覚をもち、積極的な行動をする。
棟での取組	・ＡとＢは自立部屋を準備し、就床前に自己反省を職員と一緒にする。 ・ＣとＤは日課の中でできていない事（入浴、洗濯、忘れ物）の指導を強化し、反省させる。

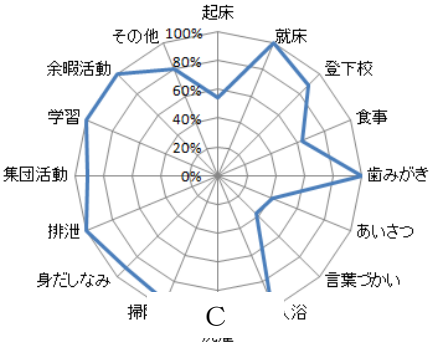
経過

1　チェックシート

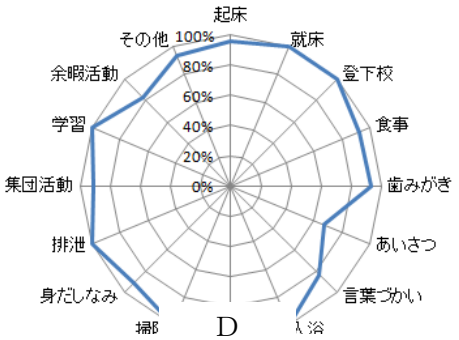
24 年度基本的生活習慣を調べるため全体でチェックシートを作成する。

それをもとに生徒の実態を把握し実践に移す。

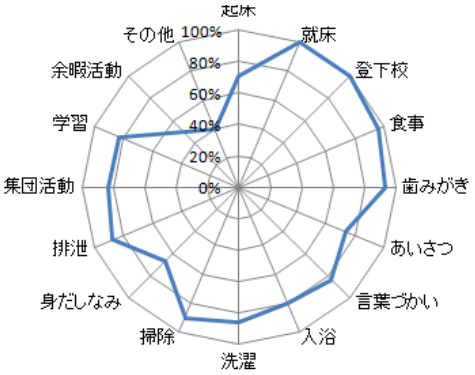
A



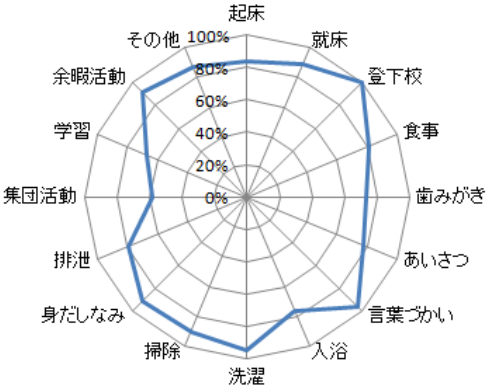
B



C



D



２　実態と課題の把握

	実態	課題
A	・あいさつなど体調や気分のムラが影響する。 ・血圧が低いこともあり、体調不良を訴える。	・あいさつが自分からできるようになる。 ・体調管理がきちんとできるようになる。
B	・あいさつ、返事を自分から言わない。 ・他生に対してきつい言葉かけをすることがある。	・あいさつが自分からできるようになる。 ・優しい言葉を意識する。
C	・下着の着用忘れがある。 ・指導してもその場限りである。	・入浴の準備の徹底。 ・分からない事や困ったときなど、自分で判断しないで先生に相談する。
D	・全体的に動作が遅く急ごうとしない。 ・１つの事に対して集中力が続かない。	・日課に沿って行動する。

３　目標

A～場に応じた行動や言葉づかいができるようになる
B～気持ちの良いあいさつをする
C～清潔さを身につける
D～行動を早くする

４　Ｈ２５年度実践

	指導内容	実態及び変容
7月	H24年度チェックシートの結果を基に個々の目標、棟の目標を設定した。	
9月	○　9/9～A自立部屋実施。 ・日課表（※表１参照）を自立部屋に掲示する ・B２静養室を自立部屋として利用し、声かけなしで日課に沿って生活させる。 ・就床前にチェックシート（※表２参照）の項目に沿って１日の振り返りをする。 ○　9/17～B自立部屋実施。 ・Aと同様の実践内容 ○　日課の中でできていない事	・チェックシート（※表２参照）にある項目についてはほとんど自主的に行動できていたが、あいさつ・自由時間の過ごし方については意識が低かった。 ・チェックシートを見直して再度を取り組むことにした。新たなチェックシート（※表３参照）を作成し、「あいさつ・返事」、「係以外の仕事（配膳）」、「食の大切さ」の項目を増やした。

	（入浴、洗濯、忘れ物）の指導 ・入浴時間は守れたかを白板を利用し、チェックする。 ・靴、下着の手洗いができたら職員に見せる。 ・本人登校後、職員がチェックする。 ・学習時間を利用して、職員が本人と一緒にチェックシートの項目に沿って振り返りをする。	・靴下、下着の手洗いが雑で汚れが落ちていないことが多かった。 ・チェックシート（※表４参照）で前日一緒に振り返ったが、次の日同様の忘れ物があった。 ・前年度より入浴時間の記録をさせていたこともあり、少しずつ急ぐ様子がみられだした。	
10月 11月	○ 10/29～Ｂ自立部屋実施。 ・先月と同様 ○ 11/11～Ａ自立部屋実施。 ・先月と同様 ○ 日課でできていない事（入浴、洗濯、忘れ物）の指導 ・先月と同様	・一人でいることを寂しがる。自由時間を楽しめておらず持て余しており、周りを気にすることが多かった。 ・配膳は他生の分も手伝っても良いと声かけていたが、自分の分だけを済ませると棟に戻ることが多かった。食事は自分で食べる量を考えるようにさせたが、当然のように毎回残していた。 ・一人で考えて過ごすことが社会に出てから必要なことだと話す意識が低い。体調不良を訴えることも多く、気持ちの良いあいさつ・返事・態度がみられなかった。 ・職員の確認がないと汚れが落ちていないことがある。 ・Ｄはチェックシートを職員と一緒にすることを楽しみにしており、忘れ物も随分減ってきた。 ・Ｃはチェックシート（※表５参照）を職員とするのは楽しそうにするが、その時のみで一人でさせると忘れ物も多く、効果がみられない。新たに入浴準備一覧表（※表４参照）を作成した。	
	Ａ、Ｂ～個別実習のため自宅帰省		
12月	○ 日課でできていない事（入浴、洗濯、忘れ物）の指導 ・先月と同様	・以前に比べ靴下、下着の汚れ落ちが良くなってきた。 ・Ｃは先月から始めた入浴準備一覧表を自分で使用して入浴準備するようになった。入浴時間は守れ	

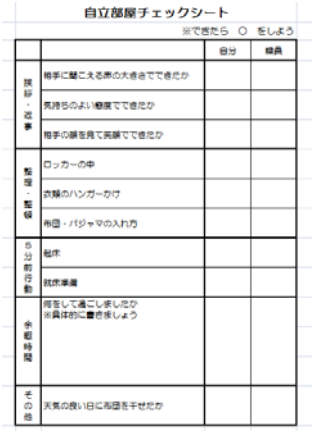
		てはいたが、本人の急ぐという意識はあまりみられなかった。 ・Ｄは入浴時間を自ら意識するようになり、早めに上がることができだした。

※表１

～日課表～

６：３０	起床、洗面、身じたく
６：５５	配膳
７：１５	朝食
８：００	歯磨き、登校準備
８：３５	登校
１５：３０	下校
１６：４５	人員確認
１７：００	配膳、清掃
１７：３０	夕食
１８：００	歯磨き、入浴、洗濯
１９：３０	人員確認、学習
２１：００	就床準備、消灯

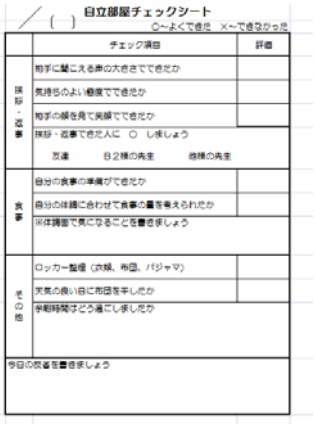
※表２


自立部屋チェックシート

※できたら ○ をしよう

		自分	職員
挨拶・返事	相手に聞こえる声の大きさでできたか		
	気持ちのよい態度でできたか		
	相手の顔を見て笑顔でできたか		
整理・整頓	ロッカーの中		
	衣類のハンガーかけ		
	布団・パジャマの入れ方		
5分前行動	起床		
	就床準備		
余暇時間	何をして過ごしましたか ※具体的に書きましょう		
その他	天気の良い日に布団を干せたか		

※表３


自立部屋チェックシート

（　）

○～よくできた　×～できなかった

	チェック項目	評価
挨拶・返事	相手に聞こえる声の大きさでできたか	
	気持ちのよい態度でできたか	
	相手の顔を見て笑顔でできたか	
	挨拶・返事できた人に ○ しましょう 友達　　B２様の先生　　他様の先生	
食事	自分の食事の準備ができたか	
	自分の体調に合わせて食事の量を考えられたか	
	※体調面で気になることを書きましょう	
その他	ロッカー整理（衣類、布団、パジャマ）	
	天気の良い日に布団を干しましたか	
	余暇時間はどう過ごしましたか	
今日の反省を書きましょう		

※表４

	月		火		水		木		金	土	日
お風呂											
洗濯											
忘れ物											

※表５

くつ下	タオル ２まい	洗い タオル	上着 (Tシャツ)	ズボン	下着	ブラジャー	パンツ くすり

今後の課題	・社会に必要なマナーなどを全体指導として話してきたが、あいさつ、返事など、家庭環境や性格もあり自主性がみられなかった。今後も意欲向上につながるように意識づけをさせたい。 ・現状では自立に向けた環境づくりが難しいが、今後も学坦と連携をとり社会自立への知識が身につくような環境づくりに努めたい。

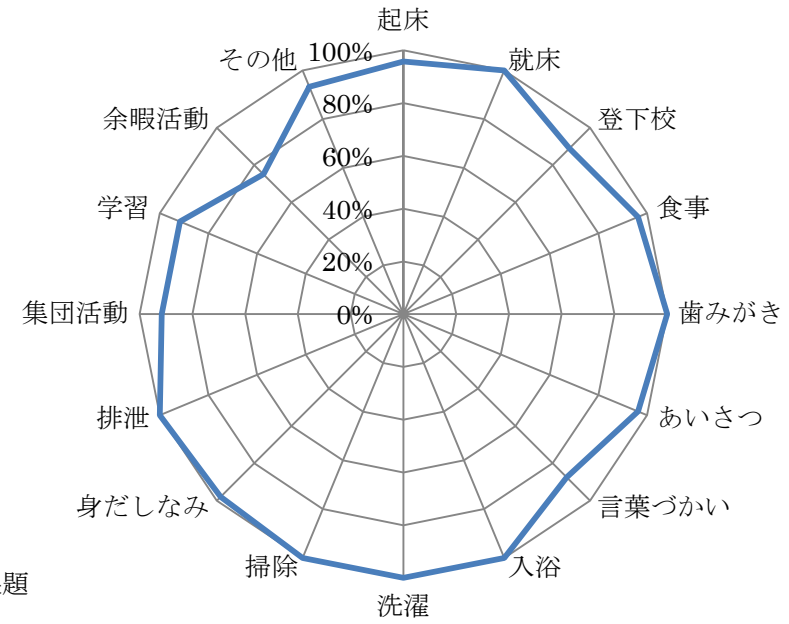
実践３　Ｃ２棟

対象舎生	高等部３年生　　Ａ子
実　態	・清潔感に欠ける。 ・自らあいさつができない。 ・他生徒と自らかかわることや会話が少ない。 ・自分の考えを相手に伝えることが苦手。 ・忘れ物が多い。 ・見通しを立てた生活が苦手。 ・時計を見る習慣がない。
目　標	○時間を意識して行動する。 ○コミュニケーション能力を身に付ける。
棟での取り組み	・実態調査　・チェックシートによる自己評価　・自ら目標を立て意識付けを図る ・ロールプレイ　・新聞発表

経　　過

１　平成２４年度　実態調査と集計結果（起床から就床まで１５項目）資料Ｉ

資料Ｉ



＜課題

・時計を見て行動できるようになる。
・自ら友だちとかかわるようになる。
・提出物を出せるようになる。
・できないことを相手に伝えきちんと断れるようになる。

２　平成２５年度　実態と課題の把握（資料Ⅰ参照）

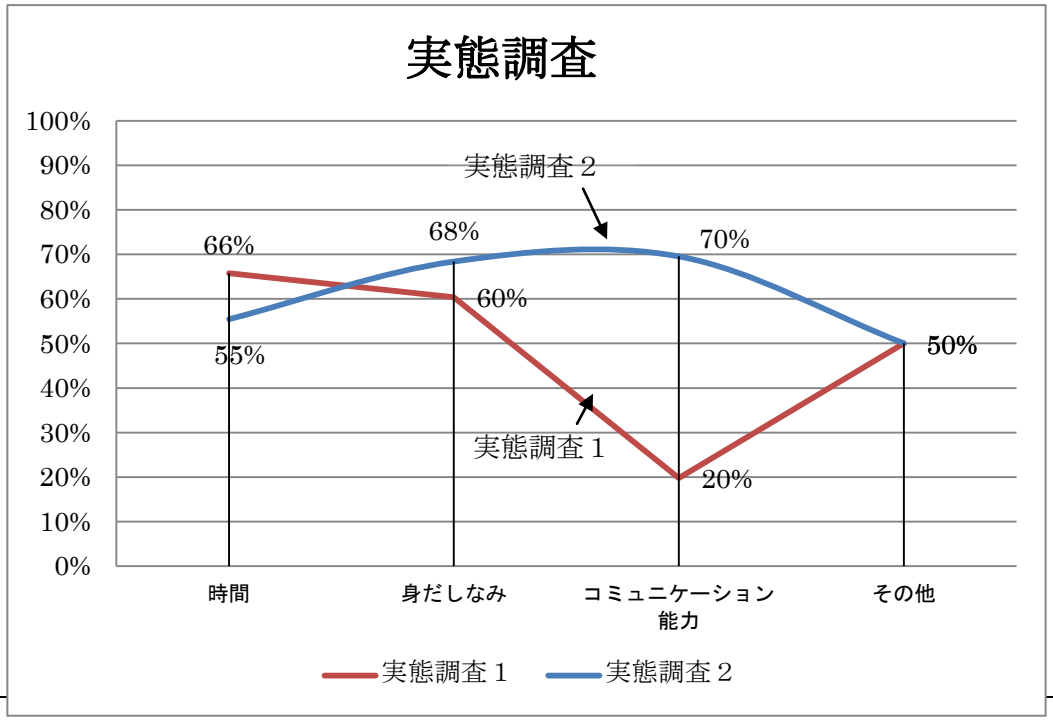
３　目標設定

４　実践経過

月	実　践	生徒の様子
８月	○平成２４年度の実態調査・課題・目標設定をもう一度見直し、実態調査表と生徒の実態に合った自己評価表を作成する。	
９月	○実態調査の実施と課題の把握 （資料Ⅱ　実態調査１） ○自己評価表の記入 ・１週目→様子観察を行い、就床前に反省の時間を設ける。（反省と目標設定） ・２週目→あいさつの仕方、時間の使い方、身だしなみについて指導をする。	・あいさつのタイミングが分からず自らあいさつをすることができない。 ・見通しが立たず時間配分が苦手なため時間に遅れることが多い。 ・１週目は、汗の処理ができなかったが、指導を行うことで気をつけるようになった。 ・困ったことを聞くことができない。
１０月	○自己評価表を基に課題の把握 （資料Ⅲ　自己評価表１） ○友だちとのかかわり方、意思表示の仕方について支援をする。（棟全体の指導をとおして意識付けを図る） ・新聞発表の取組（１０月～１２月） （コミュニケーションの向上を図るため） ・いじめ、携帯電話についてロールプレイの実施　（発言力の向上を図るため） ○職員の指示を復唱することで言葉の意味を理解させる。	・自らあいさつをすることは増えてきたが、場に応じたあいさつができず、タイミングもつかめないでいる。 ・時間に遅れることが時折見られる。 ・忘れ物が多い。 ・困ったことを相談し始める。 ・全体の場での発言がない。 ・復唱に慣れていないため職員の促しが必要である。

１１月	○自己評価表を基に課題の把握 （資料Ⅲ　自己評価表２） ○時間の意識付け、メモの活用方法について指導をする。 ○あいさつのタイミングや場に応じたあいさつの仕方を知らせる。 ○乾燥機係を任せることで時間への意識を持たせる。 ○するべきことを忘れないために、メモの活用を始める。	・積極的にあいさつをするようになる。 ・自分で目標を考えることができ始める。 ・自ら復唱することが増えてきた。 ・時計を見ることへの意識が薄い。 ・メモをとる習慣がないためうまく活用できていない。
１２月	○実態調査の実施（資料Ⅱ　実態調査２） ○自己評価表を基に課題の把握 （資料Ⅲ　自己評価表３） ○様子観察を行い、就床前に反省の時間を設ける。（反省と目標設定）	・他棟の職員にも積極的にあいさつをするようになる。表情も柔らかく笑顔が見られてきた。 ・時間に遅れないようになってきた。遅れるときは、相談することができ始める。 ・メモをとる習慣がないためうまく活用できていない。 ・頼まれたら断ることができない。

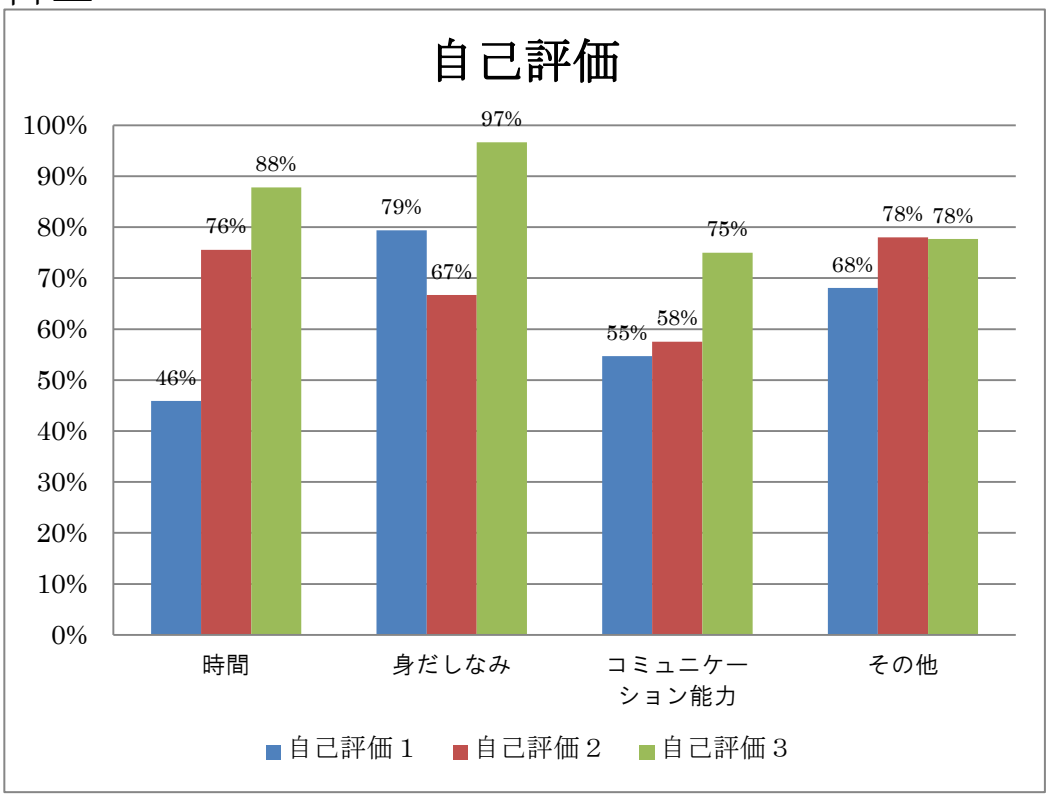
資料Ⅱ



チェック項目

【時　　間】　起床時間、洗濯終了時間、配膳時間、人員確認
【身だしなみ】　汗の処理、制服の着用
【コミュニケーション能力】　あいさつ、相談、他生徒との会話力、積極性
【そ　の　他】　指示の復唱、自主性（明日の準備、整理整頓、洗濯物の取り入れ等）

資料Ⅲ



5　成果

・あいさつのタイミングを習得し始め、自然にあいさつをすることができるようになった。
・メモを携帯するようになり使い方も分かり始めてきた。
・部屋の生徒に自ら話しかけるなど積極性が見られるようになってきた。

今後の課題	○自主性を養うための環境を整える。（あいさつ・発言力・コミュニケーション能力） ○計画的な時間の使い方を身に付ける。（メモの活用・時計を見る習慣） ○繰り返しの支援で意識付けを図る。

６　研究のまとめと今後の課題

（１）　研究のまとめ

平成２４年度は、基本的生活習慣や社会的生活習慣を６領域に分けたチェックシートを作成した。舎生全員の観察や保護者への聞き取りを実施し実態と課題の把握を中心に行った。平成２５年度は実態と課題から目標を設定し「自立に向けた支援」の取組を開始した。

それぞれの実践のグループにおいて自立部屋の設置、卒業前の話５項目、生活指導などに取り組み、ロールプレイや、自己評価と反省などの支援や指導を工夫し、舎生一人ひとりの状況に合う取組を行ってきた。（実践１～３）これらの実践結果、周りに頼らず自分で生活することの意識付けやコミュニケーション力の向上が見られたことは成果の一つと思われる。

しかし、自立部屋については、設置場所の確保の面から体験期間１週間を２クール程度の実施となった事例もあり、目標が達成できない部分も多くあった。自立部屋での生活は自立への意識付けになり意欲的に取り組む姿も見られたことから、その後の支援の方法を考えていく必要性を感じた。一方、実践３では、日々の生活の中で課題を明確にし自己評価と反省を行うことで一連の成果がみられたことから毎日の積み重ねがいかに大切かが分かる。自立部屋の取組の方法は今後の課題である。生活力を身に付けるための場所の設置、具体的で継続的な支援や指導、職員間の意識の向上と指導内容の統一が必要である。又、家庭環境も大きく影響することから保護者の理解と協力は欠かせず、家庭との連携が重要となってくる。

（２）　今後の課題

○ 卒業後を視野に入れた自立部屋の継続
○ 障がいや特性を生かした継続的な支援と指導の在り方
○ 家庭との連携の図り方

Ｘ　研究のまとめ（平成２５年度）

本年度は、『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援のあり方の改善)」を主題としつつ、各研究班（小学部、中学部、高等部、寄宿舎）のニーズに合わせた副題を設定したうえで、２年目の研究に取り組んだ。

全体研究・研修では、「共に生きる力」を育むための指導や支援に必要な事項を学ぶことに重点を置いた。あわせて知肢併置校、そしてセンター的機能を果たす特別支援学校として必要な専門的指導力の向上を目的に研修を行った。具体的には、学校全体で研究概要を共通理解した上で班別研究に取り組み、年度末にその成果を報告しあうことができた。そして「特別支援教育エリアサポート構築事業　特別支援学校専門性向上研修」を活用した研修では、校外からの講師による質の高い研修ができた。また職員のニーズに合わせ、校内の人材を活用した研修ができたことも、本校の長所を生かした研修方法として今後につながる実感を得ている。校内外の人材でこれだけ質の高い研修ができることを、幸せに思う。

今年度の取組をそれぞれ検証していく。

まず、前述の「特別支援教育エリアサポート構築事業　特別支援学校専門性向上研修」は、①本校職員の研修と②小中学校等への研修という目的がある。①についてはある程度目的を達成できたが、近年意味合いの強まっている②については、まだまだ反省点は多い。本校のセンター的役割のひとつとしてこの事業が機能するためにも、教育支援部など関係校務分掌部とより一層連携しながら実施していきたい。また、研修内容の選定についても本校の在籍の子どもを考えると①知的障がい②発達障がい③肢体不自由の研修が不可欠である。本校での研修の実施においては、「焦点化」と「均等化」のバランスをとる工夫が必要である。

班別研究では、これまで記載してきたとおり、各研究班（小学部、中学部、高等部、寄宿舎）のニーズにあった研究ができた。どの研究班でも限られた時間を有効に活用して研究を行うことができ、研究班の抱えている課題に全職員で向き合い、考えを深めたり、反省したりするよい機会となった。

校内公開授業（オープンクラス）においては、「行ってよかった」との感想が多かったが、反面全体的には参加者が少なかった。各職員の担当する授業の調整等の課題はあるが、各学部教務と連携を図り、校内で学びあう体制を深めていきたい。

また、全体報告会においては、各研究班の取組を聞くことができ、有意義な時間だったとの感想が多かった。会の運営の改善を通して、今後も研究に対する意識の向上を図っていきたい。

この研究は次年度も継続して行う。そのための課題を明らかにしておきたい。

研究過程の流れを統一することで、ひとつの研究を４つの研究班の取組として行えるよう工夫してきた。しかし、説明や理解が不十分な点もあったので次年度当初に再確認と共通理解が必要である。今年度の研究はPDCAサイクルで言えば、計画・実践の段階であった。小学部、中学部、高等部において年間指導計画の見直しや改善、授業実践ができたことは大きな成果である。寄宿舎研究班においても創造性豊かないくつかの支援の実践ができた。これらの成果を次年度に検証・改善していくことになる。その際に、適切に検証が行われるよう、主題と副題のつながりが保たれているか、また、今行われていることが研究全体でどの位置にあるのかを常に振り返りながら実践していく必要がある。

そして、研究の推進にあたっては「スクラップ　アンド　ビルド」と「業務のシステム化」にも努め続ける必要がある。研究の成果が、必ず児童生徒のためのものとなるよう、そして机上の空論とならぬよう、今後も細心の注意をはらっていきたい。

次年度は、より一層の専門性向上に努め、児童生徒一人一人の障がいの実態やニーズに応じたよりきめ細やかで質の高い実践を目指していきたい。また、本校における特別支援教育やキャリア教育の充実を図り、共生社会の実現に向けた本校の役割が果たせるようにしたい。

最後に、本年度の研究にご協力いただいた数多くのすべての皆様に感謝するともに、本研究の成果が、今後多方面での取組の一助となることを願いたい。

【引用・参考文献】

○　特別支援学校小学部・中学部学習指導要領　平成２１年３月告示／文部科学省

○　特別支援学校学習指導要領解説　総則等編（幼稚部・小学部・中学部）
平成２１年６月／文部科学省

○　特別支援学校学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）
平成２１年６月／文部科学省

○　特別支援学校　教育課程編成資料Q&A　平成２３年３月／宮崎県教育委員会　特別支援教育室

○　カリキュラム・マネジメントの実施に向けて／茨城県教育研修センター教職教育課

○　児童生徒の学習評価の在り方について（報告）
平成２２年３月２４日／中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会

教育課題研究

『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援のあり方の改善）」

（平成２４年度～平成２６年度）

研究のまとめ（２年次）

平成２６年３月

宮崎県立みやざき中央支援学校

〒８８０-０１２１　宮崎県宮崎市大字島之内２１００番地

学　校　TEL.（０９８５）３９-１６３３

FAX.（０９８５）３９-６０４６

寄宿舎　TEL.（０９８５）３９-１１５３

http://cms.miyazaki-c.ed.jp/9932/htdocs/